

昭和 44 年度

# 地力保全基本調査成績書

〔頓別地域 浜頓別町〕

北海道立中央農業試験場



## 序

現状における土地生産力は諸種の土壌的阻害要因によつて充分にその地力を発揚できない場合が少くないのみならず、一方では剝脱要因もあつてその地力は消耗低下しつゝある。従つてこれら阻害要因を排除して合理的かつ適切な地力保全の対策を推進し、もつて当面の農業構造改善の基盤整備に資するため、昭和34年より農林省農政局の助成を得て基本的土壌調査分類を実施している。

本調査成績書は昭和44年度に行なつた12地域16市町村をとりまとめたもので、こゝにこれを公表し営農安定の資に供する次第である。

現地調査の遂行に際して御協力を得た関係市町村、農業協同組合ならびに農業改良普及所の関係各位に対して、深く感謝の意を表する。

昭和45年3月

北海道立中央農業試験場

場長 和田 忠 雄

## 調査並びに取まとめ方法

本調査は、凡そ100ha以上の集団になつている農耕地および付帯地を調査対象とし、調査および取まとめに当つては、夫々下記の資料に基づいた。

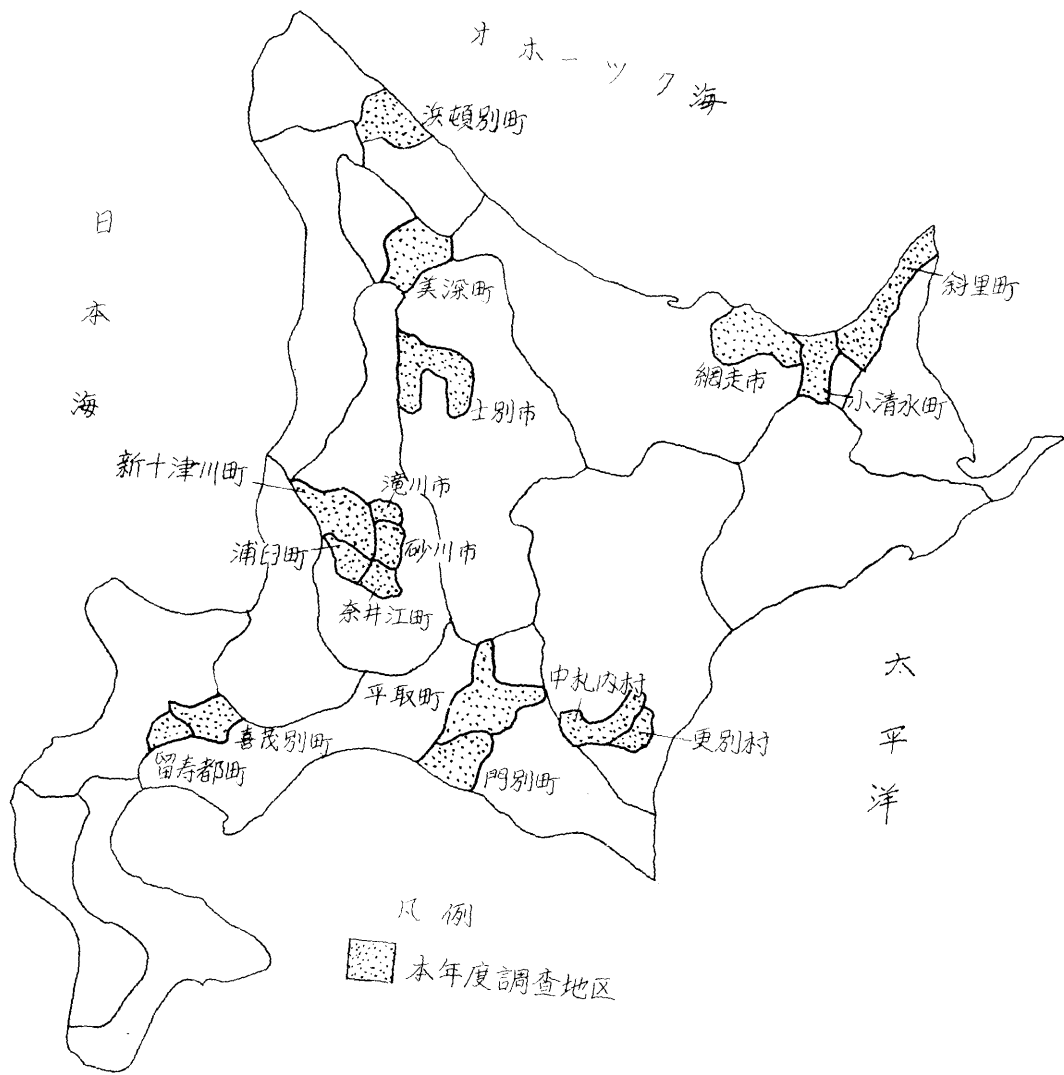
1. 土壌断面調査および現地での営農状況は地力保全対策資料第6号(昭和36年9月、農林省振興局農産課)によつた。
2. 土壌統および区の設定並びに土壌生産力可能性等級基準は、地力保全対策資料第12号(昭和40年3月、農林省農政局農産課)及び水田土壌統設定第1次案(昭和38年12月、農技研化学部土第3課)による。
3. 土壌統および土壌区の設定に当つては、北海道農業試験場農芸化学部土壌第1研究室の土性図を参照した。

化学部	部長	森	哲郎
土壌改良科	科長	後藤	計二
	第1係長	小林	荘司
	研究職員	水元	秀彰
	”	伊東	輝行
	”	木村	清
	”	松原	一実
	第2係長	山口	正栄
	研究職員	小林	茂
	”	宮脇	忠
	”	山本	晴雄
	”	高橋	市十郎
	”	上坂	晶司
	十勝農試	菊地	晃二
	”	関谷	長昭
	”	横井	義雄
	北見農試	秋山	喜三郎
	上川農試	野崎	輝義
	”	土居	晃郎
	天北農試	関口	久雄

1. 調査地域一覽

調査地域名	該当市町村名	農地面積 (調査対象面積) (ha)		既調査面積 (ha)		本年度調査面積 (ha)	
		水田	畑	水田	畑	水田	畑
樺 戸	新十津川町	4,949	1,256	0	256	4,949	1,000
石狩川下流	浦 白 町	2,002	1,141	0	141	2,002	1,000
空知中部	奈井江町	2,216	492	0	492	2,216	0
	砂 川 市	1,344	1,036	44	36	1,300	1,000
羊蹄山麓	留寿都町	60	2,675	60	75	0	2,600
	喜茂別町	232	2,003	232	3	0	2,000
日高北部内陸	平 取 町	1,244	2,364	244	364	1,000	2,000
日高沿海	門 別 町	1,162	3,183	162	183	1,000	3,000
斜 里	斜 里 町	2	9,920	2	720	0	9,200
	小清水町	0	8,852	0	852	0	8,000
網走湖畔	網 走 市	87	13,794	87	3,794	0	10,000
士 別	士 別 市	7,212	7,009	3,212	4,009	4,000	3,000
上川北部	美 深 町	1,016	4,535	16	535	1,000	4,000
日高山脈東山麓	更 別 村	0	9,180	0	180	0	9,000
	中札内村	0	6,428	0	428	0	6,000
頓 別	浜頓別町	0	1,292	0	0	0	1,292
計 12地域	16市町村	21,526	75,160	4,059	12,068	17,467	63,092

# 調査地区位置図



# 頓 別 地 域 浜 頓 別 町

## 1. 地域の概要

### 1) 位置及び調査面積

- (1) 位 置 北海道枝幸郡浜頓別町
- (2) 調 査 面 積 ( h a )

郡市町村名	調査対象面積			過年度調査面積		
	普通畑	樹園地	計	普通畑	樹園地	計
浜頓別町	1,292	—	1,292	—	—	—

本年度調査面積			次年度以降調査計画面積			備 考
普通畑	樹園地	計	普通畑	樹園地	計	
1,219	—	1,292	—	—		完了

### 2) 気 候

本町は北海道の北端部に位置し、寒冷地帯に属する。年間を通して見ると春季は降雨少なく強風と相俟って発芽不良、初期生育不振を招く。しかし7月上旬からは雨量は多目となり、この時期が牧草の収穫期に当たるために刈取後の乾燥を妨げ、品質の低下の原因となっている。また秋季まで降雨量が多く、馬鈴薯疫病の発生、腐敗薯の増加を来す。したがって一般に農期間中は冷涼である。

浜頓別町気象観測所における成績は次の通りである。

( 15 年 平 均 )

項 目		月 別								
		4	5	6	7	8	9	10	11	
気 温 (℃)	平 均	4.4	10.0	13.1	17.7	19.6	15.9	9.9	1.3	
	最 高 平 均	9.2	15.4	17.6	22.0	23.9	20.9	14.9	5.8	
	最 低 平 均	-0.5	4.6	8.6	13.4	15.3	10.8	4.8	-3.2	
降 水 量 (mm)	平 均	38	54	71	103	108	108	113	106	

晩 霜    5月15日                      初 霜    10月20日

晩 雪    5月 9日                      初 雪    10月26日

### 3) 土地条件

#### (1) 地形

本町は町総面積401.89Km<sup>2</sup>で北部は猿払村と、西部は幌延町と、南部は中頓別町、枝幸町とそれぞれ接し、東部はオホーツク海に面している。

オホーツク海面は海岸段丘が、また町のほぼ中央を縦断している頓別川流域には沖積土壌が分布し、両岸には河岸段丘が発達している。これらの河岸段丘より標高の高い地域には傾斜の急な丘陵地が分布する。

#### (2) 地質

本調査地域には極めて多種多様な土壌が分布するが、大別すると次の如く区分される。①、安別、下頓別の丘陵地に分布する第三紀層頁岩、珪岩、泥岩等の残積土壌。②安別、ポンニタチナイ等の段丘に分布する頁岩を母材とした洪積土壌。この土壌は下層がやゝグライ化し、極めて重粘堅密な土壌である。③、戸出、山軽等に分布する頁岩に火山灰を混入した洪積土壌。本土壌は下層に砂層を有する。④、頓別川及びその支流域に分布する沖積土壌。⑤、頓別川及びクッチャロ湖周辺に分布する泥炭土壌。⑥、オホーツク海岸に沿って分布する砂丘土壌。本土壌は漂白化作用が明瞭に認められる。以上の如く分類出来るが農耕地として利用されているのは、②、③、④である。

#### (3) 侵蝕状況

春季は降雨少なく、風が強いが本地帯は草地が多く、また重粘土壌が多いので風蝕のおそれはない。残積土壌及び重粘堅密な洪積土壌の水蝕が若干認められる。

#### (4) 交通

本町のほぼ中央を天北線が縦断し、また国道238号線が海岸に沿って通っているので交通の便は良い。

### 4) 土地利用及び営農状況

#### ① 浜頓別町全体の状況は次の通りである。

##### a) 経営面積(1戸当平均ha)

土地総面積	畑	牧草	永年草地
22.1	0.7	5.2	7.3

##### b) 作付面積(1戸当たり平均ha)

作物	えん麦	馬鈴薯	牧草	青刈作物	飼料根菜
面積	0.1	0.1	5.2	0.1	0.3

c) 耕種肥培償行及び収量 (kg/10a)

作物	主な品種	元 肥				追 肥			収 量
		N	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	K <sub>2</sub> O	堆 肥	N	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub>	K <sub>2</sub> O	
えん麦	前 進	4.5	6.0	2.0	1500				200
馬鈴薯	豊 林 1 号	6.5	9.0	5.0	2000				1500
牧 草	オーチャードグラス ラジノクローバ	2.0	7.0	2.0		2.0	4.0	1.5	2700

d) 家畜の種類及び頭数

	馬	乳 牛		肉 牛	豚	鶏
		成 牛	育成牛			
飼 養 戸 数	225	307	307	9	1	127
飼 育 頭 数	242	2091	1190	19	30	4459
1戸当平均飼育頭数	0.8	6.6	3.7		0.1	14.0
飼養農家1戸当頭数	1.1	6.8	3.9	2.1	3.0	35.1

e) 農機具及び施設 (総 数)

種 類	数 量	種 類	総 数
ト ラ ク タ ー	34	サ イ ロ	230
耕 耘 機	70	尿 溜	110
ト ラ ッ ク	18	ヘ ー ベ ー ラ ー	3
ミ ル カ ー	260		

本町は大部分が酪農を営んでいるが、耕地面積が狭少でかつ牧草の収量が低いため、経営は不安定である。今後は経営面積の拡大はなかなか困難なので、集約的な牧草栽培を行なって乳牛の多頭化を計るべきである。

2 土壌精型区分及び説明

1) 土壌統一覧及び土壌区一覧



(1) 土 壤 統 一 覧

土 壤 統 名	色 層 序	腐 植 層 序	礫砂礫 層を混 在する 砂層	酸化 沈積 物	土 性		母 材 堆 積 樣 式
					表 土	次 層	
下 頓 別	YR/YR	表層腐植層 あ	あ り	なし	強粘質	強粘質	残 積 (三紀層) 固 結 水 成 岩 (頁岩)
浜 頓 別	"	"	"	"	"	"	" (泥岩)
安 別	"	"	"	あり	"	"	洪 積 世 堆 積 固 結 水 成 岩 (頁岩)
浅 茅 野	"	表層多腐植層 あ	"	なし	壤 質	壤 質	" (海砂、火山灰)
モブタウス	YR/G	"	な し	あり	強粘質	強粘質	" (頁岩、火山灰)
ボンニタチナイ	"	"	"	"	"	"	" (頁岩)
ベ ニ ヤ	YR/YR	表層腐植層 な	あ り	"	砂 質	砂 質	沖 積 (海成堆積) 非 固 結 水 成 岩 (海砂)
高 砂	YR/Y	表層腐植層 あ	な し	あり	強粘質	強粘質	洪 積 世 堆 積 固 結 水 成 岩 (頁岩、硅岩)
常 盤	"	"	"	"	"	"	沖 積 世 (河成堆積) 固 結 水 成 岩 (頁岩)
仁 達 内	Y / Y	"	"	"	"	"	" ( " )
宇 津 内	YR/Y	"	あ り	なし	"	"	" ( " )
楓	YR/YR	全層多腐植層 あ	な し	"	泥 炭	泥 炭	沖 積 世 堆 積 (泥炭) (ツルコケモモイヌスゲワタスゲ)

(2) 土 壤 区 一 覧

土 壤 区 名	簡 略 分 級 式	耕地面積 ( ha )	備 考
下 頓 別	III t n s II d p (w) f e	1 5	農 牧 適 地 面 積 ( ha )
浜 頓 別	III t p f II d w n s e	3 0	"
安 別	III n II t p d w f a s	2 0 0	"
レカセウシナイ	II d g p (w) n	1 7 0	"
浅 茅 野	III (w) f n II d	4 0	"
モブタウス	III n II d g p w f	1 5	"
ボンニタチナイ	III p w n II t f a e	3 5 0	"
ベ ニ ヤ	IV (w) III t f n II e	1 5 0	"
高 砂	III t p w II n a	2 3 0	"
常 盤	II p w a	1 6 5	"
宇 會 丹	II t p (w) n	2 0	"
仁 達 内	III w II d p n	8 0	"
オ サ ツ ナ イ	III t w II d p f n	2 0	"
宇 津 内	II d p w a	7 0	"
楓 南	IV w III f n II a	2 0	"
楓 中 央	IV w III f n II a	4 0	"
楓 東	IV w III f n II a	1 0 0	"

2) 土壤統別説明

下 頓 別 統

(1) 土壤統の概説

A 土壤統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ7～10cm、腐植含量5%内外、土性はLiCである。色は10YRで彩度2、明度4、発達中度の細塊状構造、ち密度20～25でやゝ密、PH(H<sub>2</sub>O) 5.0前後、下層との層界は平坦判然。

第2層は厚さ25～30cm、腐植含量2%内外、土性はLiCである。色は7.5YRで彩度、明度共4、未風化小、中半角礫を含む。発達中度の細塊状構造、ち密度20～25でやゝ密、PH(H<sub>2</sub>O)は5.1前後、下層との層界は不規則漸変。

第3層は厚さ25～30cm、腐植含量2%内外、土性はCLである。色は10YRで彩度6、明度4、未風化小、中半角礫を含む。発達弱度の細塊状構造、ち密度20～25でやゝ密、PH(H<sub>2</sub>O)は5.1前後、下層との層界は波状判然。

第4層、礫層となる。

代 表 的 断 面 形 態

(所在地) 枝幸郡浜頓別町下頓別

第1層	0～9 <sup>cm</sup>	腐植に富む、灰褐(10YR4/2)のLiC、発達中度の細塊状構造、ち密度20～25でやゝ密、PH(H <sub>2</sub> O) 5.0、調査時の湿り半乾、境界平坦判然
第2層	9～35 <sup>cm</sup>	腐植を含む黄褐(7.5YR4/4)のLiC、未風化小、中半角礫を含む、発達中度の細塊状構造、ち密度20～25でやゝ密、PH(H <sub>2</sub> O) 5.1、調査時の湿り半乾、境界不規則漸変。
第3層	35～60 <sup>cm</sup>	腐植を含む、黄褐(10YR4/6)のCL、未風化小、中半角礫を含む発達弱度の細塊状構造、ち密度20～25でやゝ密、PH(H <sub>2</sub> O) 5.1、調査時の湿り半乾、境界は波状判然。
第4層	60cm～	礫層となる。

代表的断面の分析成績

層位	採取部位 cm	水分 %	礫含量 %	粒徑組成 %				土性	現地容積 重 g	真比重	全炭素 %	全窒素 %	炭素率	腐植率 %
				粗砂	細砂	シルト	粘土							
1	0-9	3.1		8.8	11.4	41.4	35.1	LiC	158	2.72	2.72	0.21	13	5.0
2	9-35	3.3		7.4	10.6	38.2	36.9	LiC	171	2.86	1.31	0.12	11	2.4
3	35-60	3.2		13.8	15.0	30.6	27.6	CL		2.91	1.22	0.09	13	2.3

層位	PH		置換酸度 Yt	塩基置換容量 me/100g	置換性塩基 me/100g				飽和度 %	磷酸吸収係数	有効態磷酸 mg/100g
	H <sub>2</sub> O	KCL			CaO	MgO	K <sub>2</sub> O	Na <sub>2</sub> O			
1	5.0	4.5	20.8	18.26	3.65	0.30	0.31	0.21	25	609	2.9
2	5.1	4.6	18.5	16.20	1.98	0.46	0.21	0.17	17	835	1.4
3	5.1	4.6	16.9	14.73	1.22	0.61	0.14	0.16	14	849	1.4

A-2 他の土壌統との関係

本統に隣接する宇曾丹統、宇津内統とは堆積様式を異にするので区分した。

A-3 母材 固結水成岩(頁岩、珪岩)

A-4 堆積様式 残積

B 地形 丘陵地

C 気候 年平均気温 5.4℃、年降水量 1,068mm

D 植生および利用状況 大部分がササ、シラカバを主体とした原野である。

E 農業上の留意事項

本統は未利用地であり、入植するよりは公共用草地として共同放牧利用をすることが得策と思われる。

F 分布 北海道枝幸郡浜頓別町下頓別

調査および記載責任者 奥村純一 (北海道立天北農業試験場)

年月日 昭和45年3月31日

(2) 土壌統の細分

① 土壌区一覧

土壌区分	簡略分級式
下頓別統一下頓別区	III t ns II d p(w) fe

② 土壤区別説明

下 傾 別 統 一 下 傾 別 区

示 性 分 級 式 ( 畑 )

土	表	表	耕	土	自	養	置	障	災	傾	侵	耐																						
壤	効	土	土	土	透	保	固	有	微	有	物	増	地	自	傾	人	侵	耐																
生	土	土	土	土	然	層	換	効	害	理	冠	す																						
産	土	土	土	土		分	性	態	物	的	水	り	然	為	水	風																		
力	の	の	の	の		の	の	の	質	害	の	の	の	の	の	の	の	の																
可	の	の	の	の		の	の	の	質	害	の	の	の	の	の	の	の	の																
能	の	の	の	の		の	の	の	質	害	の	の	の	の	の	の	の	の																
性	厚	難	土	着	乾	沃	状	豊	含	有	害	險	險	傾	傾	方	方																	
等	深	含	難	着	乾	沃	状	豊	含	有	害	險	險	傾	傾	方	方																	
級	さ	さ	量	易	性	性	性	度	力	力	態	量	素	度	無	性	度	度																
					湿	度	度	否	否	性	性	性	性	度	度	斜	向	斜																
	t	d	g	p	w	f	n			i	a	s	e																					
	Ⅲ	Ⅲ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅲ	3	2	(Ⅱ)	2	(2)	Ⅱ	2	1	3	Ⅲ	3	2	2	1	4	Ⅰ	1	1	Ⅰ	1	1	Ⅲ	3	n	-	Ⅱ	1	2	2
簡略分級式	Ⅲ t n s Ⅱ d p(w) f e																																	

A 土壤区の特徴

この土壤区は下傾別統に属する。表土の厚さは10cm内外で浅く、有効土層60cm内外でやゝ深い。表土は強粘質のため農具の使用に当っては抵抗がある。保肥力中庸、固定力は弱いが塩基に欠乏する。一般的に過湿、過干のおそれはない。急傾斜地が多いため、多雨時には水蝕がおこる。特殊の災害性はない。

B 植生及び利用状況

大部分ササ、シラカバ等が生育する原野である。

C 地方保全上の問題点

下層がやゝ緊密でかつ強粘質であるため透水性が不良で、しかも傾斜が急であるので、水蝕を防止する意味でも排水を施行しなければならない。また石灰、燐酸の施用が大切である。

D 分 布 枝幸郡浜頓別町下傾別

調査及び記載責任者 奥村 純一

年 月 日 昭和45年3月31日

浜 頓 別 統

1) 土壤統の概説

A 土壤統の特徴

### A-1 断面の特徴

第1層は厚さ14～15cmで腐植含量8%内外、土性はLiCが主である。色は7.5 YRで彩度2～3、明度2～3、塊状構造で発達程度は中庸である。ち密度20前後で中、PH(H<sub>2</sub>O) 5.5前後。下層との境界波状漸変である。

第2層は厚さ35cm内外で腐植含量6%内外、土性はCLが主である。色は7.5 YRで彩度3～4、明度3～6、塊状構造で発達程度は中庸である。ち密度20前後で中、PH(H<sub>2</sub>O) 5.6前後、下層との境界は漸変である。

第3層は厚さ40cm内外で腐植含量4%内外、土性はSLが主である。色は7.5 YRで彩度5～6、明度6～8、単粒ないし連結状構造である。礫に富み、ち密度25前後で密、下層との境界は不明瞭漸変である。

第4層は厚さ90cm内外以下、土性はSL、腐植含量を欠く。色は10 YRで彩度4～5、明度6～8、均質連結状、礫に富み、ち密度28前後で極密である。

### 代表的断面形態

(所在地) 枝幸郡浜頓別町共和

第1層	0～14 <sup>cm</sup>	腐植に富む、黄褐(7.5 YR 2/3)のLiC、発達中度の塊状構造、ち密度20で中、PH(H <sub>2</sub> O) 5.5、調査時の湿り半乾～湿、境界波状漸変。
第2層	14～52 <sup>cm</sup>	腐植に富む、黄褐(7.5 YR 4/4)のCL、発達中度の塊状構造、ち密度20で中、PH(H <sub>2</sub> O) 5.6、調査時の湿り湿、境界漸変。
第3層	52～90 <sup>cm</sup>	腐植を含む、黄褐(7.5 YR 5.5/6)のSL、単粒～連結状構造、ち密度25で密、半風化小角礫を含む、調査時の湿り湿、境界は不明瞭漸変。
第4層	90cm～	腐植を欠き、黄褐(10 YR 4/6)、均質連結状、孔隙は針状～細孔を含む。粘着性强。

### 代表的断面の分析成績

層位	採取部位 cm	水分 %	礫含量 %	粒径組成%				土性	現地容積 重g	真比重	全炭素%	全窒素%	炭素率	腐植%
				粗砂	細砂	シルト	粘土							
1	0-14	3.7		3.2	13.2	37.9	35.6	LiC		2.54	4.71	0.30	1.6	8.7
2	14-52	6.4		20.1	38.1	18.2	16.3	CL		2.78	3.59	0.27	1.3	6.6
3	52-90	6.0		28.9	34.5	22.0	4.5	SL		2.80	2.17	0.14	1.5	4.0

層位	PH		置換酸度 Y <sub>1</sub>	塩基置換 容量 me/100g	置換性塩基 me/100g				飽和度 %	磷酸吸 収係数	有効態 磷酸 mg/100g
	H <sub>2</sub> O	KCL			CaO	MgO	K <sub>2</sub> O	Na <sub>2</sub> O			
1	5.5	4.5	11.5	18.56	4.92	1.73	0.39	0.20		83.5	1.9
2	5.6	4.7	8.6	35.83	1.86	0.53	0.38	0.31		106.3	1.4
3	6.1	5.4	1.0	13.66	1.33	0.27	0.52	0.41		186.6	1.1

### A-2 他の土壌統との関係

本統に隣接する統としてはポンニタチナイ統、ニタチナイ統がある。ポンニタチナイ統、ニタチナイ統は砂礫を欠き、母材を異にするので区分される。

類似する統としては下頓別統があるが、腐植を欠いているので区分される。

### A-3 母材 固結水成岩(頁岩、硅岩)

### A-4 堆積様式 残積

### B 地形 丘陵

### C 気候 年平均気温 5.4℃、年降水量 1,068mm

### D 植生および利用状況

未墾地が大部分で、イタヤ、トドマツ、シラカバが散在し、下草として、ササが密生している。

### E 農業上の留意事項

表土は浅く、腐植及び養分分に欠く、強酸性を呈しているので、堆肥の投入及び石灰、磷酸を投入し、土壌改良が先決である。

### F 分布 北海道枝幸郡浜頓別町

調査および記載責任者 奥村 純一 (北海道立天北農業試験場)

年月日 昭和45年3月31日

## (2) 土壌統の細分

### ① 土壌区一覧

土 壌 区 分	簡 略 分 級 式
浜頓別統一浜頓別区	III t p f II d n s e



A 土壤統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ18~22cm、腐植含量9.4%内外、土性LiCである。色は7.5 YRで彩度1、明度3、礫なし、細粒状構造で発達程度は弱度のものが多い。ち密度20~23でやゝ密、PH(H<sub>2</sub>O) 5.4前後、下層との層界は不規則漸変である。

第2層は厚さ17~22cm、腐植含量4.3%内外、土性LiCである。色は10 YRで彩度6、明度4で礫はなく、発達中度の細塊状構造。細小孔あり、ち密度20~25でやゝ密、PH(H<sub>2</sub>O) 5.4前後、酸化沈積物有、下層との層界は不規則漸変である。

第3層は厚さ30~34cm、2%内外、土性はLiCである。色は7.5 YRで彩度、明度とも6、礫はなく、発達中度の粒状構造<sup>o</sup>細小孔富む、ち密度は20~25でやゝ密、PH(H<sub>2</sub>O) 5.6前後、酸化沈積物含む、下層との層界は不規則漸変である。

第4層、腐植は欠く、土性はLiCである。色は10 YRで彩度6、明度5で礫はなく、平板状構造ち密度25~28で堅密、酸化沈積物含む。

代表的断面形態

(所在地)

枝幸郡浜頓別町豊牛

第1層	0~20cm	腐植富む、黒色(7.5 YR 3/1)のLiC、礫なく、発達弱度の細粒状構造、ち密度20~23でやゝ密、PH(H <sub>2</sub> O)5.4、調査時の湿り半乾、層界不規則漸変。
第2層	20~40cm	腐植含む、黄褐(10 YR 4/6)のLiC、礫なく発達中度の細塊状構造、ち密度20~25でやゝ密、PH(H <sub>2</sub> O) 5.4、調査時の湿り半乾、酸化沈積物有、層界不規則漸変。
第3層	40~55cm	腐植含む、黄褐(7.5 YR 6/6)のLiC、礫はなく発達中度の粒状構造、ち密度20~25でやゝ密、PH(H <sub>2</sub> O) 5.6、調査時の湿り半乾、酸化沈積物含む、層界不規則漸変。
第4層	55cm~	腐植欠く、黄褐(10 YR 5/6)のLiC、礫はなく平板状構造、ち密度25~28で堅密、酸化沈積物含む。

代表的断面の分析成績

層位	採取部 cm	水分 %	礫含 量重 量%	粒徑組成%				土性	現地積 容重 g	真比 重	全炭 素%	全窒 素%	炭素 率	腐植 %
				粗砂	細砂	シルト	粘土							
1	0-20	4.2		6.6	12.2	32.9	36.6	LiC	(AP)154 (A) 126	2.63	5.12	0.42	12	9.4
2	20-40	3.9		8.5	13.9	36.2	38.4	LiC	162	2.88	2.32	0.16	15	4.3
3	40-55	3.7		5.9	15.1	28.3	36.4	LiC	163	2.88	1.06	0.08	13	2.0



層位	PH		置換酸度 Y <sub>1</sub>	塩基置換容量 me/100g	置換性塩基 me/100g				飽和度 %	磷酸吸収係数	有効態磷酸 mg/100g
	H <sub>2</sub> O	KCL			CaO	MgO	K <sub>2</sub> O	Na <sub>2</sub> O			
1	5.4	4.6	9.8	27.32	8.51	2.13	0.15	0.23	40	10.42	0.2
2	5.4	4.4	20.6	19.07	2.39	1.06	0.09	0.25	20	7.39	tr
3	5.6	4.4	27.8	19.59	2.48	1.06	0.12	0.45	21	9.38	tr

A-2 他の土壌統との関係

本統に隣接する浜頓別統とは堆積様式を異にし、ポンニタチナイ統とは砂礫の有無で区分される。

A-3 母材 固結水成岩(頁岩、泥岩)

A-4 堆積様式 海成洪積

B 地形 波状丘陵地

C 気候 年平均気温 5.4℃、年降水量 1,068mm

D 植生および利用状況 大部分が草地として利用されている。

E 農業上の留意事項

表層にのみ腐植を有する土壌であるから、先ず草地造成法の選択に留意し、施肥は造成時に磷酸、石灰の多用、経年に伴って窒素の増肥を必要とする。

F 分布 北海道枝幸郡浜頓別町安別

調査および記載責任者 奥村 純一(北海道立天北農業試験場)

年月日 昭和45年3月31日

(2) 土壌統の細分

① 土壌区一覧

土 壌 区 名	簡 略 分 級 式
安別統一安別区	Rnlltpwf as





D 分 布 北海道枝幸郡浜頓別町戸出、共和

調査および記載責任者 奥村純一

年 月 日 昭和45年3月31日

浅 芽 野 統

(1) 土壤統の概説

A 土壤統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は13~16cm、腐植含量10%内外、土性はSLである。色は10YRで彩度3、明度2、発達弱度の細粒状構造、ち密度18~22でやゝ密、PH(H<sub>2</sub>O) 5.2前後、層界波状漸変。

第2層10~15cm、腐植含量8%内外、土性はSLである。色は7.5YR、彩度、明度とも4、発達中度の細粒状構造、ち密度20~22でやゝ密、PH(H<sub>2</sub>O) 5.8前後、下層との層界は波状漸変。

第3層は20~23cm、腐植含量2%内外、土性はLSである。色は10YR、彩度6、明度4、単粒状構造、細小孔あり、ち密度20~22でやゝ密、PH(H<sub>2</sub>O) 5.7前後、下層との層界は不規則漸変である。

第4層、腐植欠く、土性はSである。色は10YR、彩度6、明度5、単粒状構造、ち密度20~22でやゝ密。

代表的断面形態

(所在地) 枝幸郡浜頓別町山軽

第1層	0~15cm	腐植に頗る富む、黄褐(10YR 2/3)のSL、発達弱度の細粒状、ち密度20で中、PH(H <sub>2</sub> O) 5.2、調査時の湿り半乾、境界平坦判然。
第2層	15~30cm	腐植に富む、黄褐(7.5YR 4/4)のSL、発達中度の細塊状構造、ち密度21で中、PH(H <sub>2</sub> O) 5.8、調査時の湿り半乾、境界不規則漸変。
第3層	30~50cm	腐植を含む、黄褐(10YR 4/6)のLS、単粒構造、ち密度21で中、PH(H <sub>2</sub> O) 5.7、調査時の湿り半乾、境界不規則漸変。
第4層	50cm~	腐植を欠く、黄褐(10YR 5/6)のS、単粒構造、ち密度20で中、調査時の湿り半乾。

代表的断面の分析成績

層位	採取部位 cm	水分 %	礫含量重量%	粒徑組成 %				土性	現地容積重 g	真比重	全炭素%	全窒素%	炭素率	腐植%
				粗砂	細砂	シルト	粘土							
1	0-15	3.5		34.1	25.9	13.4	12.4	SL	142	2.41	5.92	0.24	24	10.9
2	15-30	4.2		41.7	25.9	10.7	6.8	SL	138	2.61	4.23	0.19	22	7.8
3	30-50	3.0		64.4	22.4	6.0	1.5	LS	(3) 165 (4) 163	2.70	1.29	0.08	17	2.4

層位	PH		置換酸度 Y <sub>1</sub>	塩基置換容量 me/100g	置換性塩基 me/100g				飽和度 %	燐酸吸収係数	有効態燐酸 mg/100g
	H <sub>2</sub> O	KCL			CaO	MgO	K <sub>2</sub> O	Na <sub>2</sub> O			
1	5.2	4.6	9.3	19.07	3.72	0.27	0.08	0.09	2.2	1482	1.9
2	5.8	5.0	2.5	15.98	3.46	0.27	0.03	0.05	2.4	1457	tr
3	5.7	5.2	1.5	7.42	0.64	0.11	0.02	0.03	1.1	1014	tr

A-2 他の土壌統との関係

本統に隣接する統としては安別統があるが下層に酸化沈積物を含まないで区分される。

A-3 母材 非固結水成岩(海砂、火山灰)

A-4 堆積様式 海成洪積

B 地形 平坦

C 気候 年平均気温 5.4℃、年降水量 1,068mm

D 植生および利用状況

一部草地として利用されているが、大部分はササが密生する原野である。

E 農業上の留意事項

燐酸の欠乏が草地農業展開上の最大の致命傷となるから多投を要する。草地造成が容易な地帯であり、早期の開発が望ましい。

F 分布 北海道枝幸郡浜頓別町

調査および記載責任者

奥村 純一 (北海道立天北農業試験場)

年月日

昭和45年 3月 31日

(2) 土壤統の細分

① 土壤区一覧

土壤区名	簡略分級式
浅茅野統 - 浅茅野区	Ⅲ(w) f n Ⅱ d

② 土壤区分説明

浅茅野統 - 浅茅野区

示 性 分 級 式 ( 畑 )

土壤	表土	表土	表土	透	保	湿	自	保	固	土	置	有	微	酸	障	災	傾	自	傾	人	侵	耐		
生	効	土	土	土	然						層	換	"	"	効	害	冠	斜		為	水	風		
産	土	土	土	地							分	性	態	量		物	水	然				蝕		
力	の	の	の	の							の	の	の	の		的	の	の				蝕		
可	の	の	の	の							基	灰	土	里	酸	の	障	危	危	傾	傾	蝕	蝕	
能	の	粘	土								沃	状	豊	含		有	害	險	險	方				
性	厚	難	着	乾							沃	状	豊	含		有	害	險	險	方				
等	深	含	性	性	性	性	度	力	態	量	"	"	"	"	素	度	無	性	度	度	斜	斜	度	性
級	さ	量	易	湿	度	度	度	力	態	量	"	"	"	"	素	度	無	性	度	度	斜	斜	度	性
	t	d	g	p	w	f	n								i	a	s	e						
	Ⅲ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅲ	Ⅱ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅲ	Ⅰ	Ⅱ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅰ
	簡略分級式				Ⅲ(w) f n Ⅱ d																			

A 土壤区の特徴

この土壤区は浅茅野統に属する。表土の厚さは30cm内外、有効土層50cm内外でやや浅い。表土は壤質で、粘着性が弱いので農具使用は比較的容易である。過湿のおそれは少ないが、一時的に過干のおそれがある。保肥力、燐酸固定力共中庸であるが、塩基の状態は不良である。燐酸に欠乏している。地形はほぼ平坦で水蝕のおそれはなく、また特殊の障害性はない。

B 植生及び利用状況

一部草地として利用されているが、大部はササが密生する原野である。

C 地力保全上の問題点

大部分排水の必要はないが、一部排水不良地があるので暗渠を必要とする。強酸性を呈するので石灰の施用、また燐酸に甚だしく欠乏しているので、燐酸の施用が大切である。

D 分 布 北海道枝幸郡浜頓別町山軽

調査および記載責任者 奥村 純 一  
年 月 日 昭和45年3月31日

モ プ タ ウ ス 統

(1) 土壤統の概説

A 土壤統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ10～15cm、腐植含量11%内外、土性はLiC、色は10YRで彩度2、明度3、小円礫含む、発達中度の細粒状構造、ち密度2.0で中、PH(H<sub>2</sub>O) 5.6、下層との層界は波状漸変である。

第2層は厚さ15～20cm、腐植含量9%内外、土性はLiC、色は10YRで彩度1、明度2、小円礫含む、細孔あり、発達中度の細粒状構造、ち密度2.0で中、PH(H<sub>2</sub>O) 5.3、下層との層界は波状漸変である。

第3層は厚さ8～12cm、腐植含量6%内外、土性はHC、色は2.5Yで彩度2、明度6、細孔あり、柱状構造、ち密度2.1で中、酸化沈積物あり、PH(H<sub>2</sub>O) 5.3、下層との層界は不規則漸変である。

第4層は厚さ30～35cm、腐植含量2%内外、土性はHC、色は2.5Yで彩度2、明度7、細孔あり、柱状構造、ち密度2.2で中、弱グライを呈し、斑紋を含む、PH(H<sub>2</sub>O) 5.4、下層との層界は不規則漸変である。

第5層は腐植2%内外、土性はHC、色は2.5Yで彩度1、明度7、連結状構造、ち密度2.3でやや密、弱グライを呈し、斑紋を含む。PH(H<sub>2</sub>O) 5.2。

代表的断面形態

(所在地) 枝幸郡浜頓別町豊牛

第1層	0～12 cm	腐植に頗る富む、灰褐(10YR 3/2)のLiC、発達中度の細粒状構造、小円礫含む、ち密度2.0で中、PH(H <sub>2</sub> O) 5.6、境界波状漸変。
第2層	12～28 cm	腐植に富む、黒色(10YR 2/1)のLiC、小円礫含む、発達中度の細粒状構造、ち密度2.0で中、PH(H <sub>2</sub> O) 5.3、調査時の湿り半乾、境界波状漸変。
第3層	28～37 cm	腐植に富む、灰色(2.5Y 6/2)のHC、柱状構造、ち密度2.1で中、酸化沈積物あり、PH(H <sub>2</sub> O) 5.3、調査時の湿り半乾、境界不規則漸変。
第4層	37～70 cm	腐植を含む、灰色(2.5Y 7/2)のHC、柱状構造、ち密度2.2で中、グライ斑を含む、PH(H <sub>2</sub> O) 5.4、調査時の湿り湿、境界不規則漸変。
第5層	70～100 cm	腐植を含む、灰色(2.5Y 7/1)のHC、連結状構造、ち密度2.3でやや密、グライ斑を含む、PH(H <sub>2</sub> O) 5.2、調査時の湿り湿、境界不規則漸変。

代表的断面の分析成績

層位	採取部位 cm	水分 %	礫含量 %	粒徑組成 %				土性	現地容積重 g	真比重	全炭素 %	全窒素 %	炭素率	腐植 %
				粗砂	細砂	シルト	粘土							
1	0-12	4.1		14.7	8.7	29.3	33.0	Li C	143	2.47	6.10	0.49	1.2	11.3
2	12-28	4.8		24.7	5.2	21.9	37.0	Li C	137	2.63	5.09	0.35	1.4	9.4
3	28-37	3.6		1.8	4.2	31.1	57.6	H C	155	2.84	3.28	0.15	2.2	6.1
4	37-70	3.0		1.7	7.6	37.1	50.2	H C	180	2.89	1.21	0.07	1.7	2.2
5	70-	3.1		1.8	5.8	38.5	48.8	H C	181	2.80	1.34	0.05	2.5	2.5

層位	PH		置換酸度 Y <sub>1</sub>	塩基置換容量 me/100g	置換性塩基 me/100g				飽和度 %	燐酸吸収係数	有効態燐酸 mg/100g
	H <sub>2</sub> O	KCL			CaO	MgO	K <sub>2</sub> O	Na <sub>2</sub> O			
1	5.6	4.6	8.0	27.84	10.91	0.27	0.15	0.23	4.2	7.64	0.2
2	5.3	4.4	21.3	29.91	5.59	0.27	0.09	0.15	2.0	10.91	tr
3	5.3	4.4	38.1	24.41	2.48	0.35	0.11	0.17	1.3	7.88	tr
4	5.4	4.2	44.6	18.97	2.13	2.13	0.12	0.24	2.4	4.84	tr
5	5.2	4.1	53.0	22.27	4.26	4.26	0.20	0.32	4.1	4.90	tr

A-2 他の土壌統との関係

本統に隣接する統としては安別統がある。安別統は砂礫があるので区分される。類似する統としてはポンニチタナイ統があるが、下層にグライ層の有無により区分される。

A-3 母材 固結水成岩(頁岩)

A-4 堆積様式 水積(海成洪積)

B 地形 平坝

C 気候 年平均気温 5.4℃、年降水量 1,068mm

D 植生および利用状況

牧草地として利用され、周縁部はヤマハン、キハダ、サビタ、ヤチハンの疎林である。

E 農業上の留意事項

低湿地が多いので、トラクター、及び牛の踏没の激しい所では排水の必要がある。

F 分布 北海道枝幸郡浜頓別町斜内

調査および記載責任者 奥村純一 (北海道立天北農業試験場)

年月日 昭和45年3月31日





ポ ニ タ チ ナ イ 統

(1) 土壤統の概説

A 土壤統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ7～10cmで腐植含量15%内外、土性はLiCが主である。色は10YRで彩度3～4、明度3、細塊状構造で発達程度は中度である。ち密度1.4以下で疎、PH(H<sub>2</sub>O) 5.7前後。下層との境界は波状漸変である。

第2層は厚さ15cm内外で腐植含量5%以下、土性はLiCが主である。色は2.5YR～7.5YRで彩度2～3、明度4～5、膜状の酸化沈積物を含む。均質連結状、ち密度2.0～2.5で中～密、PH(H<sub>2</sub>O) 5.0前後。下層との境界は明瞭である。

第3層は厚さ40cm内外で腐植を欠き、土性はLiCが主である。色は7.5YRで彩度1、明度6～7で、膜状の酸化沈積物に富む。発達程度弱度の柱状構造である。ち密度2.0～2.5で中～密、PH(H<sub>2</sub>O) 5.0前後、下層との境界は漸変である。

第4層は厚さ40cm内外以下で腐植を欠き、土性はLiC、色は2.5GYで彩度6、明度1に7.5Y、彩度6、明度2がモザイク状に混在。ち密度は2.5で密である。

代 表 的 断 面 形 態

(所在地) 枝幸郡浜頓別町ポニタチナイ

第1層	0～7cm	腐植に頗る富む、黄褐(10YR 3/3.5)のLiC、発達中度の細塊状構造、ち密度1.4以下で疎、PH(H <sub>2</sub> O) 5.7、調査時の湿り半湿、境界漸変。
第2層	7～23cm	腐植を含む、灰褐(2.5YR 5.5/2)のLiC、膜状の酸化沈積物を含む。均質連結状、疎なくち密度2.1で密、境界明瞭。
第3層	23～65cm	腐植を欠く、灰褐(7.5YR 6.5/1) LiC、黄褐(10YR 6/5)の膜状斑紋に富む、発達弱度の柱状構造、ち密度2.3で密、層界波状漸変。
第4層	65cm～	腐植を欠く、青灰(2.5GY 6/1)と灰色(7.5Y 6/2)の、ち密度2.5で密。

代表的断面の分析成績

層位	採取部位 cm	水分 %	礫含量 %	粒徑組成 %				土性	現地容積重 g	真比重	全炭素 %	全窒素 %	炭素率	腐植 %
				粗砂	細砂	シルト	粘土							
1	0-7	4.1		1.8	18.2	36.7	27.0	LiC		2.33	7.89	0.45	18	14.7
2	7-23	3.5		1.9	11.6	37.1	40.3	LiC	153	2.61	5.40	0.21	26	4.8
3	23-65	3.1		4.2	16.8	37.9	43.0	LiC	179	2.81	1.83	0.06	31	3.4
4	65-	3.4							189	2.89	0.74	0.02	34	1.3

層位	PH		置換酸度 Y <sub>1</sub>	塩基置換容量 me/100g	置換性塩基 me/100g				飽和度 %	磷酸吸収係数	有効態磷酸 mg/100g
	H <sub>2</sub> O	KCL			CaO	MgO	K <sub>2</sub> O	Na <sub>2</sub> O			
1	5.7	4.4	18.6	25.98	4.68	1.28	0.46	0.24	26	944	1.9
2	5.0	4.2	40.7	23.37	3.19	0.89	0.21	0.18	19	825	tr
3	5.0	4.1	53.5	18.90	2.66	4.08	0.21	0.18	38	653	tr
4	5.4	3.9	48.0	23.56	6.08	10.19	0.37	0.27	72	540	tr

A-2 他の土壌統との関係

本統に隣接する統としては浜頓別統があるが、堆積様式が異なるので区分される。

A-3 母材 非固結水成岩

A-4 堆積様式 海成洪積

B 地形 波状丘陵

C 気候 年平均気温 5.4℃、年降水量 1,068mm

D 植生および利用状況

畑に利用され、主として牧草が栽培されているが、概して管理不十分で粗放のため収量は低い。

E 農業上の留意事項

典型的な疑似グライ土であり、有効成分は表層にのみ集積しているから、草地造成法はとくに表層攪拌方式をとり、窒素の欠乏に留意すべきである。

F 分布 北海道枝幸郡浜頓別町ポンニタチナイ

調査および記載責任者 奥村 純一 (北海道立天北農業試験場)

年月日

昭和45年3月31日



ベ ニ ヤ 統

(1) 土壤統の概説

A 土壤統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ3～5cmで腐植含量6%内外、土性はLSである。色は10YRで彩度1～2、明度2～3、単粒構造、ち密度10前後で粗、PH(H<sub>2</sub>O) 5.5前後。下層との境界は平坦明瞭である。

第2層は10cm内外で腐植を欠く。土性はLSである。色は7.5YRで彩度1～2、明度6～7、単粒構造、ち密度10前後で粗、PH(H<sub>2</sub>O) 5.0前後。下層との境界は波状漸変である。

第3層は15～20cmで腐植を欠く。土性はLSである。色は2.5YRで彩度6～8、明度4～5、単粒構造、ち密度25で密、PH(H<sub>2</sub>O) 5.3前後。下層との境界は波状漸変。

第4層は15～20cmで腐植を欠く。土性はLSである。色は5YRで彩度は3～4、明度6～7、単粒構造、ち密度25で密、PH(H<sub>2</sub>O) 5.4前後、下層との境界波状漸変である。

第5層は地表下40～50cm以下で腐植を欠く。土性はLS、土色は7.5YRで彩度3～4、明度6～7、単粒構造、ち密度20～25で中。

代 表 的 断 面 形 態

第1層	0～3cm	腐植に富む黄褐(10YR2/3)のLS、単粒構造、ち密度は10で粗、PH(H <sub>2</sub> O)は5.5、調査時の湿半乾。
第2層	3～11cm	腐植を欠き、灰褐(7.5YR6/2)のLS、単粒構造、ち密度は10で粗、PH(H <sub>2</sub> O)は5.0、本層は洗脱層。調査時の湿り半乾。
第3層	11～29cm	腐植を欠き、赤(2.5YR4/6)のLS、単粒構造、ち密度は25で密(集積層でオルトシュタインを形成)、PH(H <sub>2</sub> O)は5.3、調査時の湿半乾。
第4層	29～44cm	腐植を欠き、黄褐(5YR6/4)のLS、単粒構造、ち密度は25で密。PH(H <sub>2</sub> O) 5.4、調査時の湿半乾。
第5層	44～99cm	腐植を欠き、黄褐(7.5YR7/3)のLS、単粒構造、母材に達する。

代表的断面の分析成績

層位	採取部位 cm	水分 %	礫含量 %	粒径組成 %				土性	現地容積 重 g	真比重	全炭素 %	全窒素 %	炭素率	腐植 %
				粗砂	細砂	シルト	粘土							
1	0~3	2.0		15.8	72.8	0.3	10.0	LS		2.52	8.65	0.55	24.6	14.9
2	~11	1.1		17.0	77.0	0.4	5.7	LS		2.74	0.50	0.02	25.0	0.9
3	~29	1.9		17.9	75.8	tr	7.0	LS		2.72	0.59	0.02	24.5	1.0
4	~44	1.3		13.7	84.2	tr	2.0	LS		2.73	0.32	0.03	10.7	0.6
5	~99	0.8		1.4	96.6	tr	2.0	LS		2.73	0.18	0.02	6.0	0.3

層位	PH		置換酸度 Y <sub>1</sub>	塩基置換容量 me/100g	置換性塩基 me/100g				飽和度 %	磷酸吸収係数	有効態磷酸 mg/100g
	H <sub>2</sub> O	KCL			CaO	MgO	K <sub>2</sub> O	Na <sub>2</sub> O			
1	5.5	4.5	1.3	15.2	7.6	2.86	0.32	0.24	35.7	4.43	0.9
2	5.0	4.1	2.8	4.2	1.9	0.90	0.06	0.10	44.7	—	tr
3	5.3	4.3	3.0	2.3	1.6	0.15	0.05	0.11	94.4	—	tr
4	5.4	5.2	0.1	2.6	0.7	0.31	0.05	0.12	26.9	—	tr
5	5.9	5.9	—	1.3	0.6	0.20	0.08	0.09	42.0	—	tr

A-2 他の土壌統との関係

本統に隣接する浅茅野統とは堆積様式を異にするので区分される。

A-3 母材 海砂

A-4 堆積様式 砂丘

B 地形 平坦

C 気候 年平均気温 5.4℃、年降水量 1,068mm

D 植生および利用状況

現在ほとんど未利用地であるが、一部草地として利用されているところもある。

E 農業上の留意事項

我国唯一のポドソル地帯である。従ってこれの農地化は関心事であるが、養分の不足が著しいので、不耕起造成方式をとり、堆肥肥尿の還元や濃密な施肥対策が望まれる。

F 分布 北海道枝幸郡浜頓別町

調査および記載責任者 奥村純一（北海道立天北農業試験場）

年月日 昭和45年3月31日



記載責任者 奥村 純一  
年 月 日 昭和45年3月31日

高 砂 統

(1) 土壌統の概説

A 土壌統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ16cmで腐植含量は7%内外、土性はLiC、色は10YRで彩度2、明度3、発達弱度の細粒状構造、ち密度18で中、PH(H<sub>2</sub>O) 5.6、下層との層界は波状漸変。

第2層は厚さ15~20cmで腐植含量は4%内外、土性はSiC、色は10YRで彩度4、明度5、細孔あり、発達中度の塊状構造、ち密度23で中、酸化沈積物あり、PH(H<sub>2</sub>O) 5.3、下層との層界は不規則漸変。

第3層は厚さ20~25cmで腐植含量3%内外、土性はHC、色は2.5Yで彩度2、明度7、細孔あり、柱状構造、ち密度23で中、弱グライを呈し、斑紋を含む、PH(H<sub>2</sub>O) 4.9、下層との層界は不規則漸変。

第4層、腐植を欠く、土性はLiC、色は10Yで彩度1、明度7、細孔あり、連結状構造、ち密度24~26で密、弱グライを呈し、斑紋を含む。

代 表 的 断 面 形 態

(所在地) 枝幸郡浜頓別町高砂

第1層	0~16cm	腐植に富む、灰褐(10YR3/2)のLiC、発達弱度の細粒状構造、ち密度18で中、PH(H <sub>2</sub> O) 5.6、調査時の湿り半乾、境界波状漸変。
第2層	16~35cm	腐植を含む、黄褐(10YR5/4)のSiC、発達中度の塊状構造、ち密度23で中、PH(H <sub>2</sub> O) 5.3、酸化沈積物あり、調査時の湿り半乾、境界不規則漸変。
第3層	35~60cm	腐植を含む、灰(2.5Y7/2)のHC、柱状構造、ち密度23で中、PH(H <sub>2</sub> O) 4.9、グライ斑を含む、調査時の湿り湿、境界不規則漸変。
第4層	60cm~	腐植を欠く、青灰(10Y7/1)のLiC、連結状構造、ち密度24~26で密、グライ斑を含む、調査時の湿り多湿。



代表的断面の分析成績

層位	採取部位 cm	水分 %	礫含量 重量%	粒徑組成 %				土性	現地容積 重 g	真比重	全炭素 %	全窒素 %	炭素率	腐植 %
				粗砂	細砂	シルト	粘土							
1	0-16	3.4		1.9	10.3	43.6	39.7	Li C		2.68	3.67	0.25	15	6.8
2	16-35	3.6		1.1	9.9	44.8	42.6	Si C		2.86	2.13	0.08	25	4.0
3	35-60	3.7		1.4	9.3	40.0	50.1	H C		2.90	1.51	0.06	24	2.8

層位	PH		置換酸度 Y <sub>1</sub>	塩基置換 容量 me/100g	置換性塩基 me/100g				飽和度 %	磷酸吸 収係数	有効態 磷酸 mg/100g
	H <sub>2</sub> O	KCL			CaO	MgO	K <sub>2</sub> O	Na <sub>2</sub> O			
1	5.6	4.5	11.0	20.62	10.29	0.35	0.17	0.11	53	664	14.8
2	5.3	4.5	36.6	19.59	3.55	0.53	0.18	0.08	22	726	1.4
3	4.9	4.1	56.0	18.21	3.37	1.24	0.17	0.15	27	638	tr

A-2 他の土壌統との関係

本統は下頓別統に隣接するが堆積様式が異なるので区分される。

A-3 母材 固結水成岩(頁岩、硅岩)

A-4 堆積様式 海成洪積

B 地形 波状状段丘

C 気候 年平均気温 5.4℃、年降水量 1,068mm

D 植生および利用状況

ほとんど草地として利用されている。

E 農業上の留意事項

過湿地が多いので心土破砕工法を排水工事と組み合わせることが望ましい。

F 分布 北海道枝幸郡浜頓別町高砂、豊寒別、宇曾丹の一部

調査および記載責任者 奥村 純一 (北海道立天北農業試験場)

年月日

昭和45年3月31日

(2) 土壌統の細分

① 土壌区一覧

土壌区名	簡略分級式
高砂統 - 高砂区	t p w    n a

② 土壤区別説明

高砂統 - 高砂区

示性分級式 (畑)

土	表	表	表	土	自	養	置	有	障	災	傾	侵	耐	耐																					
壤	効	土	土	地	然	層	換	効	有	物	地	自	人	耐																					
生	土	土	土	の		の	の	の	害	害	冠	斜	為	水																					
産	土	土	土	の		の	の	の	物	物	す	然	為	風																					
力	の	の	の	乾		水	水	潤	質	質	水	の	の	蝕																					
可	の	の	の	粘		肥	肥	塩	害	害	の	の	の	蝕																					
能	の	の	の	土		基	基	灰	障	障	危	傾	傾	蝕																					
性	厚	難	着	乾		沃	沃	状	有	有	險	方	方	蝕																					
等	深	含	硬	性		性	性	力	無	無	度	度	度	性																					
級	さ	量	易	湿		度	度	否	性	性	斜	斜	斜	性																					
	t	d	g	p		w		f		n		i	a	s	e																				
	Ⅲ	Ⅲ	Ⅰ	Ⅰ	Ⅲ	3	2	2	Ⅲ	3	2	3	Ⅰ	1	1	Ⅱ	1	3	3	1	1	3	Ⅰ	1	1	Ⅱ	2	1	Ⅰ	1	—	Ⅰ	1	1	1
	簡略分級式 Ⅲ t p w Ⅱ n a																																		

A 土壤区の特徴

この土壤区は高砂統に属する。作土の厚さは15cm内外であるが、有効土層は60cm以上ありやゝ深い。表土は強粘質のため農具の使用にあたっては抵抗がある。過湿、過干のおそれがある。保肥力大、固定力は極めて小さい。強酸性を呈し、塩基に欠乏している。地形はほぼ平坦で水蝕のおそれはなく、また特殊の障害性はない。

B 植生および利用状況

ほとんど草地として利用されている。

C 地力保全上の問題点

一般に過湿地が多いので排水を必要とする。排水は心土破碎を併用することが望ましい。強酸性を呈するので石灰の施用が大切である。

D 分 布 枝幸郡浜頓別町高砂、豊寒別、宇曾丹の一部

調査および記載責任者 奥村 純一

常 盤 統

(1) 土壤統の概説

A 土壤統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ15cmで腐植含量12%内外、土性はHC、色は10YRで彩度3、明度4である。発達弱度の細粒状構造、ち密度1.5で中、PH(H<sub>2</sub>O) 5.6、下層との層界平坦明瞭。

第2層は厚さ30cmで腐植含量6%内外、土性はLiC、色は2.5Yで彩度2、明度6、発達弱度の細粒状構造、ち密度1.6で中、PH(H<sub>2</sub>O) 4.9、酸化沈積物に富む、グライ斑を含む、下層との層界は不規則漸変。

第3層は厚さ25cmで腐植含量5%内外、土性はLiC、色は2.5Yで彩度2、明度6、連結状構造、ち密度1.4で中、酸化沈積物、グライ斑を含む。PH(H<sub>2</sub>O) 5.0、下層との層界は不規則漸変。

第4層、腐植を欠く、土性はLiC、色は2.5Yで彩度2、明度6、連結状構造、ち密度1.0で疎、酸化沈積物、グライ斑を含む。

代表的断面形態

(所在地)

枝幸郡浜頓別町宇曾丹

第1層	0~15cm	腐植に頗る富む、黄褐(10YR4/3)のHC、発達弱度の細粒状構造、ち密度1.5で中、PH(H <sub>2</sub> O) 5.6、調査時の湿り半乾、境界平坦明瞭。
第2層	15~45cm	腐植に富む、灰(2.5Y6/2)のLiC、発達弱度の細粒状構造、ち密度1.6で中、酸化沈積物に富む、グライ斑を含む、PH(H <sub>2</sub> O) 4.9、調査時の湿り湿、境界不規則漸変。
第3層	45~75cm	腐植に富む、灰(2.5Y6/2)のLiC、連結状構造、ち密度1.4で中、酸化沈積物、グライ斑を含む、PH(H <sub>2</sub> O) 5.0、調査時の湿り多湿、境界不規則漸変。
第4層	75cm~	腐植を欠く、灰(2.5Y6/2)のLiC、連結状構造、ち密度1.0で疎、酸化沈積物、グライ斑を含む、調査時の湿り多湿。

代表的断面の分析成績

層位	採取部位 cm	水分 %	礫含量 重量%	粒径組成%				土性	現地容積 重g	真比重	全炭素%	全窒素%	炭素率	腐植%
				粗砂	細砂	シルト	粘土							
1	0-15	3.8		0.3	2.3	33.5	50.5	H C	167	2.71	6.27	0.43	15	11.7
2	15-45	3.9		1.7	7.8	43.3	38.0	Li C	176	3.04	3.07	0.22	14	5.72
3	45-75	3.3						Li C	162	2.87	2.79	0.12	24	5.19

層位	PH		置換酸度 Y <sub>1</sub>	塩基置換 容量 me/100g	置換性塩基 me/100g				飽和度 %	燐酸吸 収係数	有効態 燐酸 mg/100g
	H <sub>2</sub> O	KCL			CaO	MgO	K <sub>2</sub> O	Na <sub>2</sub> O			
1	5.6	4.5	3.1	30.2	14.36	4.26	0.77	0.15	65	930	16.8
2	4.9	4.1	15.8	25.8	7.98	4.79	0.29	0.17	51	1091	1.7
3	5.0	4.3	34.3	24.1	7.09	6.74	0.25	0.13	59	844	tr

A-2 他の土壌統との関係

本統は楓統に隣接するが、後者は泥炭土壌なので区分される。

A-3 母材 固結水成岩(頁岩)

A-4 堆積様式 河成沖積

B 地形 平坦

C 気候 年平均気温 5.4℃、年降水量 1,068mm

D 植生および利用状況 大部分草地として利用されている。

E 農業上の留意事項

一般に湿性を呈するところが多いので排水を必要とする。

F 分布 北海道枝幸郡浜頓別町

調査および記載責任者 奥村純一 (北海道立天北農業試験場)

年月日 昭和45年3月31日

(2) 土壌統の細分

① 土壌区一覧

土 壌 区 名	簡 略 分 級 式
常盤統 - 常盤区	ll p w a

② 土壤区別説明

常盤統 - 常盤区

示性分級式 (畑)

壤	効	土	土	土	透	保	自	養	置	有	微	酸	障	有	物	災	増	傾	自	傾	人	侵	耐	
生	土	土	土	土	然	然	層	換	効	害	理	冠	す	斜	然	為	水	風						
産	土	土	土	土	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の
力	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の
可	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の
能	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の
性	厚	難	着	乾	沃	状	豊	含	素	無	性	性	度	度	斜	向	斜	度	性	性	性	性	性	性
等	深	舍	易	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性
級	さ	量	易	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性	性
	t	d	g	p	w	f	n	i	a	s	e													
	II	I	I	I	II	3	2	2	II	1	2	2	I	1	1	2	I	2	1	1	1	1	1	1
	簡略分級式												II p w a											

A 土壤区の特徴

この土壤区は常盤統に属する。表土、有効土層とも深い。しかし表土は強粘質のため耕耘にはやゝ抵抗を感ずる。通気水性は比較的良好である。燐酸に欠乏する以外は、固定力も弱く、比較的養肥分に富んだ土壤である。

B 植生および利用状況

ほとんど草地として利用されている。

C 地力保全上の問題点

湿性を呈するところが多いので、排水を必要とする。

D 分布 北海道枝幸郡浜頓別町頓別川支流域

調査および記載責任者 奥村純一

(2) 土壤統の細分

① 土壤区一覧

土壤区名	簡略分級式
常盤統 - 宇會丹区	II t p(w) n



第1層は23cmで腐植は6%内外、土性はLiC、色は10YRで彩度3、明度4、発達弱度の塊状構造、ち密度2.6で密、PH(H<sub>2</sub>O) 6.2、下層との層界は不規則漸変。

第2層は22cmで腐植は5%内外、土性はHC、色は10YRで彩度3、明度4、発達中度の角塊状構造、ち密度2.0で中、弱グライを呈し、斑紋を含む、PH(H<sub>2</sub>O) 5.5、下層との層界は不規則漸変。

第3層、腐植を欠く、土性はCL、色は7.5Yで彩度1、明度5、発達弱度の角塊状構造、ち密度2.0で中、酸化沈積物に富み、グライ斑を含む。

### 代表的断面形態

(所在地)

枝幸郡浜頓別町仁達内

第1層	0~23cm	腐植に富む、黄褐(10YR 4/3)のLiC、発達弱度の塊状構造、ち密度2.6で密、PH(H <sub>2</sub> O) 6.2、調査時の湿り半乾、境界不規則漸変。
第2層	23~45cm	腐植に富む、黄褐(10YR 4/3)のHC、発達中度の角塊状構造、ち密度2.0で中、グライ斑を含む、PH(H <sub>2</sub> O) 5.5、調査時の湿り湿、境界不規則漸変。
第3層	45cm~	腐植に欠く、灰(7.5Y 5/1)のCL、発達弱度の角塊状構造、ち密度2.0で中、酸化沈積物に富み、グライ斑を含む、調査時の湿り潤。

### 代表的断面の分析成績

層位	採取部位 cm	水分 %	礫含量 %	粒径組成%				土性	現地容積重 g	真比重	全炭素%	全窒素%	炭素率	腐植%
				粗砂	細砂	シルト	粘土							
1	0-23	2.6		0.2	10.6	38.6	41.0	LiC	166	2.68	3.06	0.20	15	5.7
2	23-45	2.4		0.1	3.8	44.6	47.3	H C	146	2.69	2.92	0.24	12	5.4

層位	PH		置換酸度 Y <sub>1</sub>	塩基置換容量 me/100g	置換性塩基 me/100g				飽和度 %	燐酸吸収係数	有効態燐酸 mg/100g
	H <sub>2</sub> O	KCL			CaO	MgO	K <sub>2</sub> O	N <sub>2</sub> O			
1	6.2	5.5	1.0	2.242	18.52	1.86	0.15	0.15	93	680	6.2
2	5.5	4.6	12.5	1.181	14.61	3.65	0.17	0.19	85	653	2.0







### A 土壤区の特徴

この土壤区は仁達内統に属する。作土の厚さは15cm内外であり、有効土層も50cm内外でやゝ深い。表土は粘質のため農具の使用にあたってはやゝ抵抗を感じる。地下水位が高いうえ、保水性、透水性が不良のため湿性を呈する。苦上に富む以外は、燐酸、塩基に欠乏し、固定力も大きい。特殊の障害性はないが、冠水のおそれがある。

### B 植生および利用状況

シラカバ、ハンノキ、ヤチダモ、シコロ、ヨシ、イワノガリヤス、ササ等が密生する未利用地が多い。

### C 地力保全上の利用状況

過湿地が多いので排水が先行しなければならない。強酸性を呈するので石灰の施用、燐酸欠乏が甚しいので、燐酸の多投が必要である。

### D 分 布 北海道枝幸郡浜頓別町仁達内、楓の一部

調査および記載責任者 奥村 純一

## 宇 津 内 統

### (1) 土壤統の概説

#### A 土壤統の特徴

##### A-1 断面の特徴

第1層は厚さ15~20cm、腐植含量7%内外、土性はHC、色は10YRで彩度1、明度は3、発達中度の細粒状構造、ち密度1.8~2.0で中、PH(H<sub>2</sub>O) 6.7、下層との層界は平坦明瞭である。

第2層は厚さ15~20cm、腐植含量5%内外、土性はHCである。色は10YRで彩度1、明度は4、細孔あり、柱状構造、ち密度1.8で中、酸化沈積物あり、PH(H<sub>2</sub>O) 6.3、下層との層界は不規則漸変である。

第3層は厚さ30~35cm、腐植含量5%内外、土性はLiCである。色は10YRで彩度1、明度は7、細孔あり、連結状構造、ち密度1.7で中、弱グライを呈し斑紋を含む、PH(H<sub>2</sub>O) 5.7内外、下層との層界は不規則漸変である。

第4層、腐植含量6%内外、土性はLiCである。色は10YRで彩度1、明度は6、連結状構造、ち密度1.3で中、弱グライを呈し、斑紋を含む。

### 代 表 的 断 面 形 態

(所在地) 枝幸郡浜頓別町宇津内

第1層	0~18cm	腐植に富む、黒(10YR3/1)のHC、発達中度の細粒状構造、ち密度1.8~2.0で中、PH(H <sub>2</sub> O) 6.7、調査時の湿り半乾、境界平坦明瞭。
第2層	18~37cm	腐植に富む、灰褐(10YR4/1)のHC、柱状構造、ち密度1.8で中、PH(H <sub>2</sub> O) 6.3、酸化沈積物あり、調査時の湿り半乾、境界不規則漸変。

第3層	37~70cm	腐植を欠く、灰褐(10YR7/1)のLiC、連結状構造、ち密度1.7で中、グライ斑を含む、調査時の湿り湿、境界不規則漸変。
第4層	70cm~	腐植を欠く、灰褐(10YR6/1)のLiC、連結状構造、ち密度1.3で中、グライ斑を含む、調査時の湿り湿。

代表的断面の分析成績

層位	採取部位 cm	水分 %	礫含量 %	粒径組成%				土性	現地容積重 g	真比重	全炭素%	全窒素%	炭素率	腐植%
				粗砂	細砂	シルト	粘土							
1	0~18	3.0		1.1	8.2	38.9	48.8	H C	159	2.71	3.71	0.18	2.0	6.9
2	18~37	3.2		0.2	3.2	44.4	50.5	H C	156	2.78	2.94	0.19	1.5	5.5
3	37~70	3.0		6.5	25.2	37.5	26.3	Li C	164	2.84	2.69	0.11	2.4	5.0
4	70~	3.1		3.4	23.7	41.4	30.8	Li C	162	2.75	3.24	0.15	2.1	6.0

層位	PH		置換酸度 Y <sub>1</sub>	塩基置換容量 me/100g	置換性塩基 me/100g				飽和度 %	磷酸吸収係数	有効態 磷酸 mg/100g
	H <sub>2</sub> O	KCL			CaO	MgO	K <sub>2</sub> O	Na <sub>2</sub> O			
1	6.7	6.1	0.3	2.63	23.81	6.25	0.17	0.10	115	802	37.9
2	6.3	5.9	0.6	2.92	17.02	10.64	0.21	0.12	96	858	7.1
3	5.7	5.0	5.0	2.44	6.74	15.25	0.27	0.15	92	968	3.4
4	5.2	4.4	2.23	3.00	6.74	17.02	0.31	0.27	81	835	5.3

A-2 他の土壌統との関係

本統は独立した沖積の土壌統で、同じ沖積でも湿性の仁達内統と区分される。

A-3 母材 固結水成岩(頁岩)

A-4 堆積様式 河成沖積

B 地形 平坦

C 気候 年平均気温 5.4℃、年降水量 1,068mm

D 植生および利用状況 ほとんど草地として利用されている。

E 農業上の留意事項

土質的にはさして問題点は少ない。経営面積が狭少であるから集約的な牧草栽培に徹すべきである。

F 分布 北海道枝幸郡浜頓別町  
調査および記載責任者  
年月日

奥村 純一 (北海道立天北農業試験場)  
昭和45年3月31日

(2) 土壤統の細分

① 土壤区一覧

土壤区名	簡略分級式
宇津内統一宇津内区	ll d p w a

② 土壤区別説明

宇津内統一宇津内区

示性分級式 (畑)

壤	効土	土	土	土	地	然	層	換	" "	効	害	理	冠	す	斜	傾	人	侵	耐	耐																
生	土	土	土	土	土	然	層	換	" "	効	害	理	冠	す	斜	傾	人	侵	耐	耐																
産	土	土	土	土	土	然	層	換	" "	効	害	理	冠	す	斜	傾	人	侵	耐	耐																
力	の	の	の	の	の	然	層	換	" "	効	害	理	冠	す	斜	傾	人	侵	耐	耐																
可	の	の	の	の	の	然	層	換	" "	効	害	理	冠	す	斜	傾	人	侵	耐	耐																
能	の	の	の	の	の	然	層	換	" "	効	害	理	冠	す	斜	傾	人	侵	耐	耐																
性	厚	難	土	着	乾	沃	状	豊	含	" "	" "	害	障	危	危	傾	傾	方	蝕	蝕																
等	深	含	土	着	乾	沃	状	豊	含	" "	" "	害	障	危	危	傾	傾	方	蝕	蝕																
級	さ	量	易	性	性	性	性	度	力	力	態	量	" "	" "	素	度	無	性	度	度	斜	斜	度	性	性											
II	I	II	I	II	3	2	2	II	1	2	3	I	1	2	1	I	1	1	3	1	1	1	I	1	1	II	2	1	I	1	—	—	I	1	1	1
簡略分級式 ll d p w a																																				

A 土壤区の特徴

この土壤は宇津内統に属する。作土は20cm内外で薄い、有効土層は70cm以上でやや深い。表土は強粘質であるため農具の使用は抵抗を感じる。過湿のおそれは少ない。保肥力は大きく、磷酸固定力は小さい。磷酸、加里に欠乏するが、酸性は弱く、石灰、苦土に富んでいる。特殊の障害性はない。

B 植生および利用状況

ほとんど草地として利用されている。

C 地力保全上の問題点

あまり問題点はないが、局部的に過湿地が散在するので排水を必要とする。また磷酸、加里の施用も大切である。

D 分布

北海道枝幸郡浜頓別町宇津内、茂宇津内

記載責任者 奥村 純一

楓 統

A 土壤統の特徴

A-1 断面の特徴

第1層は厚さ15~20cm内外、ワタスゲ、ヌマガヤ(ハンノキ)の分解中庸の中間泥炭土である。色は7.5 YR、彩度2~3、明度1~2である。PH(H<sub>2</sub>O) 5.0前後。

第2層は厚さ30cm前後、ワタスゲ、ヌマガヤ(ハンノキ)を構成植物とする分解稍良好な中間泥炭土である。色は10 YR、彩度3、明度2である。PH(H<sub>2</sub>O) 5.0前後。

第3層は50cm内外以下、ヨシを構成植物とする分解良好な低位泥炭土である。色は10 YR、彩度2、明度2~3である。土砂の混入多し。

代表的断面形態

(所在地)

枝幸郡浜頓別町

第1層	0~18 cm	黒(7.5 YR 2/2)のワタスゲ、ヌマガヤ(ハンノキ)の構成植とする中間泥炭、PH(H <sub>2</sub> O) 5.0前後。
第2層	18~49 cm	黄褐(10 YR 2/3)の中間泥炭、ワタスゲ、ヌマガヤ(ハンノキ)を構成植物とし、分解稍良好、PH(H <sub>2</sub> O) 5.0前後。
第3層	49 cm~	灰褐(10 YR 2.5/2)の低位泥炭、ヨシを構成植物とし、分解良好、土砂混入多。

代表的断面の分析成績

層位	採取部位 cm	水分 %	礫含量 重量%	粒 径 組 成 %				土性	現地容積 重 g	真比 重	全炭 素%	全窒 素%	炭素 率	腐植 %
				粗砂	細砂	シルト	粘土							
1	0-18	3.3							1.72		31.1	1.96	1.6	57.4
2	18-48	6.2							1.83		29.6	1.47	2.0	54.5

層位	PH		置 換 酸 度 Y <sub>1</sub>	塩基置換 容 量 me/100g	置 換 性 塩 基 me/100g				飽和度 %	磷酸吸 収係数	有効態 磷酸 mg/100g
	H <sub>2</sub> O	KCL			CaO	MgO	K <sub>2</sub> O	Na <sub>2</sub> O			
1	5.0	4.8	6.0	52.24	7.80	4.96	1.11	0.51		2330	1.4
2	4.9	4.4	10.0	41.24	4.25	4.25	0.21	0.41		1990	2.9









A 土壌区の特徴

この土壌区は綱統に属する。表土の厚さは50cm内外、有効土層は1m以上。ヨシを構成植物とした低位泥炭土である。前記2土壌区より概して地力は高い。養肥分は中庸であるが、燐酸に乏しく、酸性が強い。

B 植生および利用状況

本統の中では最も利用されている土壌区で、利用地は草地である。

C 地力保全上の問題点

排水不良であるので排水が必要。酸性矯正とともに燐酸質資材の多投が必要である。

D 分 布 北海道枝幸郡浜頓別町、豊寒、仁達内、常盤

調査および記載責任者 奥村 純 一

年 月 日 昭和45年3月31日

3 保全対策区分及び説明

1) 保全対策地区の説明

土壌の性状及び主要な保全対策を検討の上、次の6保全対策地区を設定した。

保全対策地区名	該 区	面積(ha)	主 な 特 徴	重要な保全対策
ボンニタチナイ	下 頓 別 浜 頓 別 ボンニタチナイ 高 砂	5,383	波状丘陵地、 草地化の進捗は緩慢、 堅密、グライ性土壌 である。	表層攪拌方式を主体と した草地造成方式、 施肥改善、 土地改良(排水)
安 別	安 別 - 安 別 安別レカセウシナイ モブタウス	1,254	波状丘陵地、 草地化が進捗中 やグライ化土壌	草地造成方式、 施肥改善、
浅 茅 野	浅 茅 野	653	平坦地。天北地方 の代表的酪農地帯。	未利用地の草地化、 施肥改善、
ベ ニ ヤ	ベ ニ ヤ	849	砂丘地、 我国唯一のポドソル 土壌。 大部分が未利用地、	農業としての利用はあ まり好ましくない。若 し開発するとすれば、 公共草地化、
常 盤	常 盤 - 常 盤 常 盤 - 宇 曾 丹 仁 達 内 - 仁 達 内 仁 達 内 - オサツナイ 宇 津 内	3,801	平坦沖積地、 畑作物から酪農への 転換地帯で面積狭少、 排水不良地が多い、	単位面積当たりの収量 増大、 施肥改善、 土地改良(排水)
楓	楓 - 楓 南 楓 - 楓 中 央 楓 - 楓 東	1,949	平坦、 泥炭地で排水不良、 草地化が計画中、	公共草地化、 土地改良(排水、酸性 矯正)

## 2) 保全対策地区別説明

### 《ボンニタチナイ保全対策地区》

#### (1) 分布状況

郡市町村名	面積 (ha)	備考(該当土壌区)
枝幸郡浜頓別町	5,383	下頓別統 浜頓別統 ボンニタチナイ統 高砂統

#### (2) 保全対策地区の特徴と地力保全上の問題点

##### ① 特徴と問題点

本調査地域の大部分を占め、地形はほぼ丘陵～傾斜面に位置しており春季融雪時に流去水の発生があるが、その被害は軽微である。

本地区は残積および洪積土壌で粘性が強く堅密であって、通称重粘地と呼ばれている範疇にある。従って、湿潤時は過湿、旱魃時は旱害を蒙るなど、土壌の水分子物理性は必ずしも良好とは考えられない。

本地区中ボンニタチナイ統は十余年前の入植によって草地開発化されているが、他の3統はその進捗率は微々たるものがある。

##### ② 営農の方向

本地区のうちボンニタチナイ統は典型的な重粘地(疑似グライ土)として有名であるが、このような地帯においても不耕起草地造成の可能なことが立証されている。すなわち、土壌の断面形態から考えると表層にのみ養分が集積し下層土は化学的にも劣悪であるから、表層処理を大切にすることに尽きるわけで、この点からも反転耕起は望ましくない。従って、今後ササ地などの未耕地の草地開発化は進捗するであろうから、ローターベーター方式、重デスク方式、蹄耕方式などを十分に活用すべきである。これらの方式を採用する場合は、2、3の付随する諸技術を必要とするから予め注意が肝要である。

つぎに本地区の土壌は燐酸の極端な欠乏、強酸性であるから、石灰による十分な酸性矯正と不断の燐酸の多用は不可欠である。同時に生産される堆肥尿の草地への還元は肥料費の節減と有機物の補給に卓効があるから春秋に拘泥することなく散布すべきであろう。

不耕起造成草地では土地改良の重要性は薄い、さらに高次の目標収量を掲げる場合は根圏域の膨軟化と保水性、排水性の改善のために暗渠排水、心土破碎などの工法の導入が必要になってくる。

本地区の営農方向はボンニタチナイ統が草地酪農化、他の3統は隣接する他統がすでに活潑な酪農地域であることを考えるとき公共草地として活用する方が有利と思われる。

3) 地力保全対策

対策の種類	対象地及び対象面積	実施方法	対策資材及び機械器具の種類、型式、数量
草地造成方式	下 頓 別 浜 頓 別 ボンニタチナイ 高 砂 1,872 ha	表層攪拌を主体とした不耕起方式、公共草地の場合ほとくに必要	造成用農具の導入、技術指導の徹底、造成費の補助
施肥改善	” ”	石灰、燐酸の増施肥、堆肥、尿の還元	指導の徹底
土地改良	” ”	明暗渠排水工事 心土破壊工事	工事費の補助

《安別保全対策地区》

(1) 分布状況

郡市町村名	面積 (ha)	備考(該当土壌区)
枝幸郡浜頓別町	1,254	安別統一 安別区 安別統一レカセウシナイ区 モブタウス区

(2) 保全対策地区の特徴と地力保全上の問題点

① 特徴と問題点

本地区は海成洪積の段丘面 (T<sub>2</sub>) に属し、波状丘陵地である。春季融雪時における流去水の影響はない。

土壌はやムグライ性の影響をうけており、牧草の生育に及ぼす水分環境の点は若干不良ではあるが、前述ボンニタチナイ統ほど劣悪ではない。

草地化が進捗中であり、燐酸の不足が目立つ。

② 営農の方向

本地区は比較的酪農経営が古くから行なわれているが、経済的安定規模の確立されていない農家も多く存在し、これらを含めて早期の基盤を創出しなければならない。

このためには、規模を拡大するための草地開発が必要であり、その要点はボンニタチナイ保全対策地区のそれに準拠すればよい。

土壌は開墾当初より依然として燐酸の欠乏する地帯が多く見られ、本地区の草地管理の要諦は燐酸の

多給に尽きる。堆肥、尿の還元は勿論のことである。排水を中心とした土地改良については、局部的に存在する湿性土壌についてのみ実施することが必要である。

### 3) 地力保全対策

対策の種類	対象地及び対象面積	実施方法	対策資材及び機械器具の種類、型式、数量
草地造成方法	安別ー安別 安別ーレカセウナイ モブタウス 1,254 ha	表層攪拌を主体とした不耕起方式	造成用農具の導入、技術指導の徹底、造成費の補助
施肥改善	” ”	石灰、燐酸の増施、堆肥、尿の還元	指導の徹底
土地改良	” ” (局部的に湿性な処)	暗渠排水工事、心土破碎工事	工事費の助成

### 《浅茅野保全対策地区》

#### (1) 分布状況

郡市町村名	面積 (ha)	備考 (該当土壌区)
枝幸郡浜頓別町	653	浅茅野統

#### (2) 保全対策地区の特徴と地力保全上の問題点

##### ① 特徴と問題点

本地区は海成洪積の段丘面 (T<sub>2</sub>) に属し、平坦地である。

本土壌は利尻ローム及び砂礫岩を母材とした埋積物であるから、透水性が良好であり、逆に早魃時は過早の恐れがある。

天北地帯を代表する草地酪農地域で、草地造成や維持管理が他の土壌統に比較して有利と云われ、多収獲農家も本統から出現した。しかし未利用地も多く存在する。

##### ② 営農の方向

本地区における営農は現時点で考えるならば安定化の方向にあると云えよう。しかし、将来の酪農のあり方からみれば更に単位面積当たりの増収と、一方では経営面積の拡大を図り、多頭数飼育へと進むべきであろう。

このためには、土壌中において不足する燐酸の多用を中心とした施肥法の改善と牧草利用体系の確立が必要である。土地改良の必要性はほとんどなく、むしろ堆肥などの有機物の多用によって、地力の増進と土壌水分環境の安定化を図るべきと思う。

(3) 地力保全対策

対策の種類	対象地及び対象面積	実施方法	対策資材及び機械器具の種類、型式、数量
未利用地の草地造成	浅茅野 653 ha	耕起、不耕起方式のいずれも可	技術指導の徹底、造成用農具の導入、造成費の補助
施肥改善	” ”	燐酸の多用、堆肥の多投	技術指導の徹底

《ベニヤ保全対策地区》

(1) 分布状況

郡市町村名	面積 (ha)	備考(該当土壌区)
枝幸郡浜頓別町	849	ベニヤ統

(2) 保全対策地区の特徴と地力保全上の問題点

① 特徴と問題点

本地区はオホーツク海岸面に並列する海岸砂丘地帯である。強風によって風蝕が若干認められる。

土壌は全層海砂からなり、とくに頓別川以北地域は我国唯一の典型的なポドソルとして著名である。

すなわち、表層はA<sub>1</sub>層でモルの集積があるが、その直下層からは腐植がなく鉄、ばん土の漂白層、集積層となっている。従って養分保肥力に乏しく、また養分の絶対量も極端に少ない。

本地区は大部分が未利用地で、一部に浜頓別町営公共草地在存在するのみである。

② 営農の方向

本地区の自然植生景観が独特なことから、「ベニヤ原生花園」としてリクリエーションの場となっており、一方ではポドソル土壌であり、これらを含めて北オホーツク道立自然公園の指定を受けている地域でもある。本地域は農業上に利用するのは地力論的に不利でもあり、むしろ公園として、または学術上貴重な土壌として自然の姿を破壊することなく活用することの方が有利である。

しかし、実際に一部は公共草地として利用されている地域もあるので、これの維持に対する技術的な方向は、不耕起造成方式の導入と多肥による草量の確保以外にない。

(3) 地力保全対策

対策の種類	対象地及び対象面積	実施方法	対策資材及び機械器具の種類、型式、数量
草地造成方式	ベニヤ 849 ha	不耕起方式の厳守	造成用農具の導入、造成費の補助、指導の徹底
肥培管理	” ”	各種養分の多用 堆肥、尿の還元	技術指導の徹底

《常盤保全対策地区》

(1) 分布状況

郡市町村名	面積 (ha)	備考(該当土壌区)
枝幸郡浜頓別町	3,801	常盤統一常盤区 常盤統一宇會丹区 仁達内統一仁達内区 仁達内統一オサツナイ区 宇津内統

(2) 保全対策地区の特徴と地力保全上の問題点

① 特徴と問題点

本地区は小河川流域に分布する平坦な河成沖積で、春季の融雪時に冠水をうけることがある地区である。

土壌が粘質なために排水不良地が多く、しばしば過湿を呈することが多い。しかし、一般に生産力が高いので古くより根菜類を主体とした畑作経営が行なわれ、現在はすべて草地酪農に切替っている。

② 営農の方向

将来の草地酪農の方向は大面積、多頭数飼育に進まない限り経営は採算がとれないと云われているのに、本地区は経営面積が狭少である。つまり、根菜類を栽培していた時代の営農に対する考え方を払拭しない限りは酪農経営の展開は困難である。換言すれば、本地区こそ集約栽培によって出来る限り多収を挙げる以外にその手段がない。

従って、徹底的な施肥改善 — 施肥量の増加、施肥法の濃密化 — が必要であり、永年荒廃草地と称されるものが存在してはならない。そして、春季の洪水を防止する手段や、暗渠排水等による土壌の過湿を抑制する方法も導入されなければならない。

(3) 地力保全対策

対策の種類	対象地及び対象面積	実施方法	対策資材及び機械器具の種類、型式、数量
施肥改善	常盤—常盤 常盤—宇會丹 仁達内—仁達内 仁達内—オサツナイ 宇津内 3,801 ha	施肥量の増加 施肥法の濃密化 堆肥、尿の還元	技術指導の徹底
土地改良	” ”	洪水の防止 明暗渠排水工事	工事費の補助

◀ 楓 保 全 対 策 地 区 ▶

(1) 分 布 状 況

郡 市 町 村 名	面 積 (ha)	備 考 ( 該 当 土 壤 区 )
枝 幸 郡 浜 頓 別 町	1,949	楓 統 一 楓 南 区
		楓 統 一 楓 中 央 区
		楓 統 一 楓 東 区

(2) 保 全 対 策 地 区 の 特 徴 と 地 力 保 全 上 の 問 題 点

① 特 徴 と 問 題 点

本地区は頓別川流域およびクッチャロ湖周辺に分布する低位、中間、高位泥炭地で過湿地である。従って利用面積は少なく殆んどが未利用原野である。

② 営 農 の 方 向

現在までの草地化は飲質土壤地等が中心であった。しかし、泥炭地も脚光を浴びつつあり、本地区の頓別川流域地帯は公共草地として草地化が計画中である。浜頓別町には依然として飲質土壤の未利用地が多いから、開拓入植はむしろ当該土壤を対象とすべきで、泥炭地は前述のように公共性をもたせる方が得策である。

この場合、幹線大明渠、暗渠を設置して排水を図ることが最も必要である。これらの施工については当初から地区全体を計画的に実施することが望ましい。つぎに、泥炭地は大農具や放牧牛による耐踏圧に弱いから、耕起造成をするよりは不耕起造成により泥炭そのものの堆積様式の理学的特性を利用すべきである。草地造成後の肥培管理は低コスト維持管理法を採用することが好ましいと思われる。

(3) 地 力 保 全 対 策

対 策 の 種 類	対 象 地 及 び 対 象 面 積	実 施 方 法	対 策 資 材 及 び 機 械 器 具 の 種 類 、 型 式 、 数 量
排 水	楓 一 楓 南 楓 一 楓 中 央 楓 一 楓 東 1,949 ha	幹線大明渠排水 明、暗渠排水	工事費補助
草 地 造 成 方 式	” ”	不耕起方式	造成費の補助 技術指導
肥 培 管 理	” ”	低コスト維持 管理法	技術指導

2) 土壤分析成績

保 全 対 策 区	土 地 層 深	点 番 号	位 cm	理 学 性														化 学 性												
				風乾細土中		細土無機物中					土 性	現地における理学性 100 cc 中					PH		置 換 酸 度	有 機 物			塩 基 置 換 容 量 me /100g	置換性塩基100g中			石 灰 飽 和 度 %	燐 酸 吸 収 係 数	有 効 態 燐 酸 mg /100g	
				水 分 %	腐 植 %	粗 砂 %	細 砂 %	砂 合 計 %	シ ル ト %	粘 土 %		容 積 重 g	真 比 重	固 相 容 積 cc	水 分 容 積 cc	空 気 容 積 cc	孔 隙 率 %	H <sub>2</sub> O		KCl	T-C %	T-N %		C/N	CaO mg /100g	MgO mg /100g				K <sub>2</sub> O mg /100g
				風乾細土中	腐植	粗砂	細砂	砂合計	シルト	粘土	容積重	真比重	固相容積	水分容積	空気容積	孔隙率	H <sub>2</sub> O	KCl	T-C	T-N	C/N	CaO	MgO	K <sub>2</sub> O	石灰飽和度	燐酸吸収係数	有効態燐酸			
ポ ン ニ タ チ ナ イ	下 頼 別	1	0~9	3.1	5.0	8.8	11.4	20.2	41.4	35.1	LiC	158	2.72	4.2	4.3	15	5.8	5.0	4.5	20.8	2.72	0.21	1.3	18.3	102.2	6.0	14.6	20.0	609	2.9
		2	~35	3.3	2.4	7.4	10.6	18.0	38.2	36.9	LiC	171	2.86	4.3	4.8	9	5.7	5.1	4.6	18.5	1.31	0.12	1.1	16.2	55.4	9.2	9.9	12.2	835	1.4
		3	~60	3.2	2.3	13.8	15.0	28.8	30.6	27.6	CL							5.1	4.6	16.9	1.22	0.09	1.3	14.7	34.2	12.2	6.6	8.3	849	1.4
2N	浜 頼 別	1	0~14	3.7	8.7	3.2	13.2	16.4	37.9	35.6	LiC		2.54					5.5	4.5	11.5	4.71	0.30	1.6	18.6	137.8	34.6	18.3	26.5	835	1.9
		2	~52	6.4	6.6	20.1	38.1	58.2	18.2	16.3	CL	144	2.78	3.1	5.9	10	6.9	5.6	4.7	8.6	3.59	0.27	1.3	35.8	52.1	10.6	17.8	5.2	1065	1.4
		3	~90	6.0	4.0	28.9	34.5	69.4	22.0	4.5	SL	124	2.80	2.2	6.2	1.6	7.8	6.1	5.4	1.0	2.17	0.14	1.5	13.7	37.2	5.4	24.4	9.7	1866	1.1
安 別	安 別	1	0~20	4.2	9.4	6.6	12.2	18.8	32.9	36.6	LiC	140	2.63	4.0	5.0	10	6.0	5.4	4.6	9.8	5.12	0.42	1.2	27.3	238.3	42.6	7.1	31.2	1042	0.2
		2	~40	3.9	4.3	8.5	13.9	23.4	36.2	38.4	LiC	162	2.88	3.8	5.1	11	6.2	5.4	4.4	20.6	2.32	0.16	1.5	19.1	66.9	21.2	4.2	12.5	739	tr
		3	~55	3.7	2.0	5.9	15.1	21.0	28.3	36.4	LiC	163	2.88	4.0	4.8	12	6.0	5.6	4.4	27.8	1.06	0.08	1.3	19.6	69.4	21.2	5.6	12.6	938	tr
別	レ カ セ ウ シ ナ イ	1	0~17	4.5	11.2	7.8	21.9	29.7	31.9	22.7	CL	136	2.49	3.5	4.9	1.6	6.5	6.7	6.3	7.0	6.05	0.47	1.3	30.9	796.9	21.2	44.2	92.0	1148	7.4
		2	~32	3.7	5.3	8.9	17.7	26.6	33.4	31.3	LiC	159	2.67	4.1	4.9	10	5.9	5.7	4.7	0.5	2.87	0.18	1.6	20.9	178.6	5.4	76.6	30.5	1310	2.6
		3	~50	4.3	3.0	13.9	30.2	44.1	32.7	15.8	CL	174	2.81	4.5	4.9	6	5.5	5.5	4.5	15.5	1.64	0.11	1.4	19.2	59.6	7.0	14.6	11.1	821	2.3
浅 茅 野	浅 茅 野	1	0~15	3.5	10.9	34.1	25.9	60.0	13.4	12.4	SL	142	2.41	3.9	4.8	13	6.1	5.2	4.6	9.3	5.92	0.24	2.4	19.1	104.2	5.4	3.8	19.5	1482	1.9
		2	~30	4.2	7.8	41.7	25.9	67.6	10.7	6.8	SL	138	2.61	3.3	4.3	2.4	6.7	5.8	5.0	2.5	4.23	0.19	2.2	16.0	96.9	5.4	1.4	21.6	1457	tr
		3	~50	3.0	2.4	64.4	22.4	81.8	6.0	1.5	LS	165	2.70	4.8	4.6	6	5.2	5.7	5.2	1.5	1.29	0.08	1.7	7.4	17.9	2.2	0.9	8.6	1014	tr
安 別	モ ブ タ ウ ス	1	0~12	4.1	11.3	14.7	8.7	23.4	29.3	33.0	LiC	143	2.47	3.8	5.0	12	6.2	5.6	4.6	8.0	6.10	0.49	1.2	27.8	305.5	5.4	7.1	39.2	764	0.2
		2	~28	4.8	9.4	24.7	5.2	29.9	21.9	37.0	LiC	137	2.63	3.3	5.2	15	6.7	5.3	4.4	21.3	5.09	0.35	1.4	29.9	156.5	5.4	4.2	18.7	1091	tr
		3	~37	3.6	6.1	1.8	3.2	5.0	31.1	57.6	HC	155	2.84	3.6	5.3	11	6.4	5.3	4.4	38.1	3.28	0.15	2.2	24.4	69.4	7.0	5.2	10.2	788	tr
		4	~70	3.0	2.2	1.7	7.6	9.3	37.1	50.2	HC	180	2.89	4.4	5.3	3	5.6	5.4	4.2	44.6	1.21	0.07	1.7	19.0	59.6	42.6	5.6	11.2	484	tr



2) 土壤分析成績

保 全 策 区	土 地 区	地 点 番 号	層 位	深 さ cm	理 学 性											化 学 性																
					風乾細土中		細土無機物中					土 性	現地における理学性 100 cc 容中					P H		置 換 酸 度	有 機 物			塩 基 置 換 容 量 me /100g	置換性陽基100g中			石 灰 飽 和 度 %	燐 吸 収 係 数	有 効 態 燐 濃 度 mg /100g		
					水 分 %	腐 植 %	粗 砂 %	細 砂 %	砂 合 計 %	シル ト %	粘 土 %		容 積 重 g	真 比 重	固 相 容 積 cc	水 分 容 積 cc	空 気 容 積 cc	孔 隙 率 %	H <sub>2</sub> O		KCl	T-C %	T-N %		C/N	CaO mg /100g	MgO mg /100g				K <sub>2</sub> O mg /100g	
ボ ン ニ タ チ ナ イ	ボ ン ニ タ チ ナ イ	8V	1	0~7	4.1	14.7	1.8	18.2	20.0	36.7	27.0	LiC		2.33					5.7	4.4	18.6	7.89	0.45	1.8	26.0	131.0	25.6	21.6	18.0	944	1.9	
			2	~23	3.5	4.8	1.9	11.6	13.5	37.1	40.3	LiC	153	2.61	3.6	5.8	4	6.2	5.0	4.2	40.7	5.40	0.21	2.6	23.4	89.3	17.8	9.8	13.6	825	tr	
			3	~65	3.1	3.4	4.2	16.8	21.0	37.9	43.0	LiC	179	2.81	4.5	5.3	2	5.5	5.0	4.1	53.5	1.83	0.06	3.1	18.9	74.5	81.6	9.8	14.1	653	tr	
			4	65~	3.4	1.3								189	2.89	5.0	4.6		5.0	5.4	3.9	48.0	0.74	0.02	3.4	23.6	170.2	203.8	17.4	25.8	540	tr
ベ ニ ヤ	ベ ニ ヤ	12	1	0~3	2.0	14.9	15.8	72.8	88.6	0.3	10.0	LS		2.52					5.5	4.5	1.3	8.65	0.35	2.5	15.2	212.8	57.2	15.0	50.0	433	0.9	
			2	~11	1.1	0.9	17.0	77.0	94.0	0.4	5.7	LS		2.74					5.0	4.1	2.8	0.50	0.02	2.5	4.2	53.2	18.0	2.8	45.2		tr	
			3	~29	1.9	1.0	17.9	75.8	93.7	tr	7.0	LS		2.72					5.3	4.3	3.0	0.59	0.02	2.5	2.3	44.8	3.0	2.4	69.6		tr	
ボ ン ニ タ チ ナ イ	高 砂	9	1	0~16	3.4	6.8	1.9	10.3	12.2	43.6	39.7	LiC		2.68					5.6	4.5	11.0	3.67	0.25	1.5	20.6	288.1	7.0	8.0	49.9	664	14.8	
			2	~35	3.6	4.0	1.1	9.9	11.0	44.8	42.6	SiC		2.86					5.3	4.5	36.6	2.13	0.08	2.5	19.6	99.4	1.0	8.5	18.1	726	1.4	
			3	~60	3.7	2.8	1.4	9.3	10.7	40.0	50.1	HC		2.90					4.9	4.1	56.0	1.51	0.06	2.4	18.2	94.4	24.8	8.0	18.5	638	tr	
常 盤	常 盤	20	1	0~15	3.8	11.7	0.3	2.3	2.6	33.5	50.5	HC	167	2.71	4.3	4.9	8	5.7	5.6	4.5	3.1	6.27	0.43	1.5	30.2	402.1	85.2	36.2	47.6	930	16.8	
			2	~45	3.9	5.7	1.7	7.8	9.5	43.3	38.0	LiC	176	3.04	4.3	4.5	12	5.7	4.9	4.1	15.8	3.07	0.22	1.4	25.8	223.4	95.8	13.6	30.9	1091	1.7	
	字 會 丹	15	1	0~15	2.4	6.3	38.0	33.2	71.2	12.9	10.4	SL	172	2.78	4.6	4.4	10	5.4	6.7	5.9	0.6	1.49	0.13	1.0	21.0	526.4	49.6	5.6	89.7	413	1.7	
			2	~50	2.7	2.8	1.8	36.0	37.8	22.9	22.1	SL	160	2.83	4.2	4.2	1.6	5.8	7.0	6.4	0.4	1.39	0.17	9	20.3	541.2	60.2	5.2	95.4	679	tr	
	盤 内	仁 達 内	22	1	0~23	2.6	5.7	0.2	10.6	10.8	38.6	41.0	LiC	166	2.68	4.5	4.4	1.1	5.5	6.2	5.5	1.0	3.06	0.20	1.5	22.4	521.4	37.2	7.1	83.1	680	6.2
				2	~45	2.4	5.4	0.1	3.8	3.9	44.6	47.3	HC	146	2.69	3.5	5.1	1.4	6.5	5.5	4.6	12.5	2.92	0.24	1.2	21.8	409.1	73.0	8.0	67.0	653	2.0
盤 内	オ サ ン ナ イ	23	1	0~15	4.4	17.7	2.1	7.8	9.9	31.5	29.4	LiC	119	2.45	2.0	6.9	1.1	8.0	4.9	3.4	26.0	9.53	0.74	1.3	33.9	136.1	36.4	12.2	14.3	1754	4.0	
			2	~45	3.1	10.9	0.6	32.2	32.8	41.6	26.9	LiC	135	2.62	2.5	7.0	5	7.5	5.0	4.4	41.5	5.85	0.40	1.4	24.4	74.5	53.4	6.1	10.9	825	1.4	

2) 土壤分析成績

保 全 対 策 区	土 壤 番 区 号	地 点 番 号	層 位	深 さ cm	理 学 性											化 学 性																
					風乾細土中		細 土 無 機 物 中					土 性	現地における理学性 100 cc 容中						PH		置 換 酸 度	有 機 物			塩 基 置 換 容 量 me /100g	置換性塩基100g中				石 灰 飽 和 度 %	磷 酸 吸 収 係 数	有 効 態 磷 酸 mg /100g
					水 分 %	腐 植 %	粗 砂 %	細 砂 %	砂 合 計 %	シル ト %	粘 土 %		容 積 重 g	真 比 重	固 相 容 積 cc	水 分 容 積 cc	空 気 容 積 cc	孔 隙 率 %	H <sub>2</sub> O	KCl		T-C %	T-N %	C/N		CaO mg /100g	MgO mg /100g	K <sub>2</sub> O mg /100g				
常 津 盤	宇 津 内	1	0~18	3.0	6.9	1.1	8.2	9.3	38.9	48.8	HC	159	2.71	41	47	12	59	6.7	6.1	0.3	3.71	0.18	2.0	26.3	666.7	125.0	8.0	90.5	802	37.9		
		2	~37	3.2	5.5	0.2	3.2	3.5	44.4	50.5	HC	156	2.78	38	51	11	62	6.3	5.9	0.6	2.94	0.19	1.5	29.2	476.6	212.8	9.9	58.3	858	7.1		
		3	~70	3.0	5.0	6.5	25.2	31.7	37.5	26.3	LiC	164	2.84	36	61	3	64	5.7	5.0	5.0	2.69	0.11	2.4	24.4	188.7	305.0	12.7	27.6	968	3.4		
		4	70~	3.1	6.0	3.4	23.7	27.1	41.4	30.8	LiC	162	2.75	36	64	0	64	5.2	4.4	22.3	3.24	0.15	2.1	30.0	188.7	340.0	14.6	22.5	835	5.3		
楓	南	HH	1	0~15	3.3	71.3												4.5	4.5	4.0	38.7	2.15	1.8	50.5	298.0	53.2	42.3	21.1	1640	5.3		
		2	15~	6.9	62.2														4.6	4.5	8.8	33.8	1.77	1.9	43.3	119.3	42.6	7.0	9.8	1560	6.5	
	中 央	TPI	1	0~18	3.3	57.4													5.0	4.8	6.0	31.1	1.96	1.6	52.2	218.4	99.2	52.2	14.9	2330	1.4	
		2	~48	6.2	54.5								90	1.83	10	80	10	90	4.9	4.4	10.0	29.6	1.47	2.0	41.2	119.0	85.0	9.9	10.3	199	2.9	
	東	IPI	1	0~14	7.8	42.5													4.1	3.5	19.6	24.4	2.03	1.2	65.6	89.9	4.0	20.2	4.9	200	9.8	
		2	~31	11.2	73.8														4.1	3.5	19.0	31.4	2.09	1.5	95.6	91.3	5.0	16.5	3.4	400	9.4	